
道化師消失 - 黒いピエロ -

あゆみかん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

道化師消失 - 黒いピエロ -

【Nコード】

N8591D

【作者名】

あゆみかん

【あらすじ】

【シリアス/恋愛/ホラー/全10話+2話】 猟奇、沈黙、人の闇。『黒いピエロ』が昼夜を問わず都会を徘徊し殺人を。都会と都会の間で次元の壁を越えて2人は出会う。定められた沈黙世界の『掟』と罪を前に、静寂のなかで。かおりは彼の全てを受け入れる事ができるのか……？ 別話短編の『それでも道化師は笑う』と本編後日談『残酷のナイフ』付です。

第1話【黒いペーパードール】（前書き）

作者、何かにとりつかれた作品。

第1話【黒いピエロ】

僕が君を守る

俺が君を襲う

誰が君をさらう？

僕が君を守る どうなっても知らない

……

「いや……ここに、来ないでっ……！」

女子高生は制服姿のまま、メインストリートから外れた裏通り沿いの雑居ビルとビルの間へ。走り追い込まれて、ゴミの詰まった青いポリバケツに、すがるように倒れた。

手元に学生靴は無い。靴も片方、逃げて駆け回るうちに脱げて何処かへ置いてきてしまった。

腰を抜かすように座り込んでしまい、その拍子にポリバケツの蓋がズレた。女子高生は咄嗟に、蓋を目の前の『敵』へと投げた。

カララララ……

簡単に蓋は弾かれて、横へと転がった。女子高生と『敵』との距離は縮まる。一歩一歩と、確実に……。

女子高生も負けはしない。抵抗を考えつく限り実行しようとする。

自分の周りにある物を、例えそれが生ゴミや汚物といった不衛生な物であっても。

掴めるものは何でも掴み、『敵』へと投げつけた。『敵』は、何が自分に飛んできてぶつかっても、あまり気にもせず。衣服が汚れたなら汚れたで構わないといった素振りで近づく。時折、肩にブランとかかったバナナの皮なんかを手で振り払いながら。

見ているのは女子高生だけだ。

お前だけだと。

そう細い目が言っている。

「ひっ……」

辺りは暗い。もう夜の9時だ。女子高生は夜遊びをして帰る途中だった。

自分の軽率だった今までの行動を激しく後悔していた。でももう遅い。遅過ぎた……女子高生は自分のスカートのポケットをまさぐる。携帯電話は落としてきた鞆の中だ。他に何でもいい、危険を知らせる何か、手掛かりを残せそうな、何か！ 何か無いの！ と。クシャリと軽い音をポケットの中から出した。昼間に食べたお菓子の飴の包み紙だ。

畜生！

女子高生は激しく悪態をつき頭をブンブン振り回した。

『敵』はコートの袖口からスルリと滑らかに。……刃先が長いナイフを取り出した……。

女子高生の頭髪を、革手袋をした手で掴む。同時に、女子高生は背中に当たっているピンヤリと冷たく硬いコンクリートへと、頭を強く打ちつけられた。

ガンッ。

ガンッ。

……女子高生は歯をあらわにし、苦痛を浮かべた。「いやあああ

……」小さな真珠のピアスが飛ぶ。

泣き叫んでも、『敵』は……。

「……」

ナイフが、空いたもう片方の手で振りかざされた。空には満月が煌々と光る。皮肉にもナイフの刃先がよく映えた。

ブスツ。

夜の繁華街は騒がしい。異質な音でも誰も気がつかない。

ブスという音が何十奏と音を奏でていても。誰も振り向いてもくれない……。

『敵』は口唇の両端を限界まで持ち上げて、少しだけ開いた口の間から歯を見せた。

笑う。

白い息がそれを隠す。

汚い身なりの野犬が、散り放られたゴミの一つ一つを漁りながら通りすぎて行った。

都市と都市との間には『黒いピエロ』が現れると。誰かがそんな事を言い出した。

都市と都市？ ……表と裏の事だ。光と闇。昼と夜。白と黒。

伝説では無い。実際に殺人が行われているのだから。

黒いピエロと称された殺人鬼は不特定な場所、不特定な時間に前触れも無くやって来る。ある時は夜の闇に紛れヒツソリと。またある時は真っ昼間から堂々と。

思いつきで『やって』いるかのようだ。警察も困っている。

ただ犯行は都市部に限られるので、すぐに犯人を割り出せるだろ

うと勝手な世間は皆そう思っていた。

黒いピエロは電波に乗って世界中にその名を轟かせる。地球の裏側でも名を知る者が居よう。

女子高生は服ごと身を切り裂かれる。

子供は首を吊られる。

男は八つ裂きにされる。

暗闇の中に浮かび上がる顔だとしても、何故だか犯人は捕まらない。

年月が過ぎた……。

明るい茶色煉瓦の外装のマンション。5階建てで、部屋は南向きだった。天気の良い日は、ご近所中で布団がベランダで並び干される。下の階では子供がよく走り回っている様子が窺えた。

木緑はさすがに無いが交通量が都市にしては少なめで、人が住むには静かで最高の好条件かもしれない。

家賃は驚くほど高くも無かった。マンション自体は古い建物だが、煉瓦造りが逆に興趣さを醸し出している。だから、たまたまこの地へ来た かおりはすぐにこの物件話に飛びつき引越しを即決したのである。

綾野かおり。春から新人OLをしている。高校卒業後に单身引越して来てからは、もう2年余りになる。

実家からは近いので、時々親元を頼りながらの生活をしつつ、何とか自立を試みている。

初めてもらった給料では、思い切ってパソコンを買った。持ち運びもしたかったのでノートパソコンを選んだ。自室の簡易デスクの上に、それだけをチョコンと置く。何だかそれだけで自分がつっても賢くなった気分だった。

「さてと……何をしようかな」

今日は仕事は休み。かおりは購入したばかりのパソコンを前に、手をこすり合わせながら色々と考えていた。

前から同僚や付き合いのある友人達がパソコンの話をしているのを聞いていて、かおりもいつかは話が分かるようにまずは購入してじっくり勉強しようと思っていたのだ。それで……。

かおりは、しばらく他人のサイトや自社のホームページなどを渡り歩く。特にコレといった調べ物があるわけでも無く……しばらく時間が経って、目の疲れを感じた。かおりは紅茶でも飲もうとパソコンからいったん離れた。

紅茶。

かおりの好物に入る。

砂糖を入れないという。こだわりもあった。

デスクに向かって座り直しながら、湯気立つ紅茶を飲んで落ち着いた。「おいし……」

部屋に入ってすぐ壁沿いに置いてある全身鏡に、安堵するかおりの姿が映る。

ベランダに続くガラスの引き戸の側に、折りたたみ式のベッド。戸に向けた頭側の方に小さなディスプレイ・ボックスが置いてあり、そこには壊れている……ラッパを吹く兵隊のオルゴールが、ポツンとあった。

決して鳴らないオルゴール。『サイレン』という曲が鳴るはずだった、もらった始めから一回も鳴る事の無かったオルゴール……。かおりは捨てなかつた。何故かコレだけは。何故なのか、自分でも分かつてはいない。

コレが一年前、付き合っていた彼からもらった物であっても。

他の写真や小物は別れた後、思い切って全部処分した。見るだけで辛かった時期が。かおりにはあった。その時に、捨てる事を拒んだ自分が居た……。

不思議ね。どうして壊れているのに捨てられなかつたんだろう……

…。

カタカタタ……ベランダに吊り下げられた、小さな円形の洗濯ハンガーが風のせいでガラス戸を叩いた。辺りは静かだった。掛け時計は夜の9時を指している。

奇妙な事だが、かおりは静かなのは好むが、『沈黙』は苦手だった。

犬の吠える声や、さっきのように風によって騒ぐ小物達の音。何処からか聞こえてくる子供の足音……それぞれは小さく、うるさいと感じた事は無い。普通に“静か”なだけ。

でも『沈黙』は。

人との会話の合間に突如として現れる『沈黙』。

生活音も人の気配も全く無い空間。

かおりには、耐えられなかった。

「『サイレン』か……」

そういえば一度も、オルゴールどころか原曲すら聴いた事が無かった事を思い出すかおり。

「そうだ。調べてみよう」

パソコンのキーボードを叩き出した。ち、ん、も、く……。

『沈黙』

検索をかけてみると、とても迷うほどのサイトの数々。「うーん……」

かおりはずっと、ズラリと並ぶサイト名を順番に見ていった。すごく多いんだなあ、うなだれながらも。

やがて、一つのサイトが目にとまる。無料動画のサイトだった。開くと、バンドのドラムソロで始まった曲と共に映像が勝手に流れ始めた。「……」

かおりは見入る。ボーカルの彼　西洋人のような若い男の子。

シャツを重ね着してネクタイを締めている。その上から緑を含んだ黒いコートを着て、頭にはコートよりも緑が濃いような色のニット帽を被っていた。

画面の中央で、こちらを真正面で見つつ。始め真剣な表情かと思ったら変わって、楽しげに笑って英語で歌っている。曲のテンポやリズムに合わせて弾むように、時々ネクタイを締め直そうとしたり頭を抱えたりしてアクションをつけて。笑顔がとても可愛らしい。曲は、静かなのかと思いついていたがエレポップ風だった。意外だなと驚く。

これが『サイレン』？ 沈黙という意味では無かったの？？ と。かおりは一瞬分からなくなってきそうだったが……。

画面の中の背景が暗闇だと気がつく。「……」

ピエロ。

……沈黙とは違う単語が思い浮かばれた。

『ピエロ』？ 何で彼がそうだと思った？

かおりは探る。自分のインスピレーションの原因を。何故。どうして。

すぐに分かった かおり。

「そうか、肌が白いからだ……」 答えは簡単だった。

暗闇の中でボーカルの彼だけが、浮かび上がっているのだ。白人だから、その白さは際立つ。目立ってしまうのだ。

それが……かおりの中から『ピエロ』という単語を引き出してきたというわけで。

「ピエロ……」

かおりは何度も何度も この動画を繰り返し見続けた。理由は分からない。まるで魔力のようなもので吸い寄せられ何かにとり憑かれたかのように、画面に釘付けになってしまった。

英語の歌詞は、全く分かりそうにも無い。
かおりには別に、それは苦では無かった。

……

沈黙、サイレン、ピエロ……

何かを忘れている。思い出せないけれど……。

かおりは そう感じて、イスから離れた。もう時間は夜遅い。明日も仕事だ、そろそろ……。

動画は まだ流れ続けていたが、かおりはベッドの脇にある折りたたまれたパジャマをとろうと、そちらに近づいた。

全身鏡の前へ。屈み込んでいるかおりが映っている。

すると突然、照明がチカチカとチラつき出した。「アレ？」

かおりが立ち上がって変だなあと天井の蛍光灯を見上げると、照明はフツと消えてしまう。「ヤダ！ 停電？」

パジャマを抱えながら。全身鏡へは背を向けて。

幸いな事に今夜は月明かりが部屋の中を照らしてくれていた。おかげで……。

かおりの背後に立つ者の顔が 白く不気味に暗がり映える。

動画の歌う彼とほぼ同じような、コートと帽子を着て被り。指先

をカットした手袋をした両手は両ポケットにしまい込んで。

鏡の中に居た『彼』は。

かおりの後ろから肩を掴む。

「昔に会ったね 会いたかったよ かおり」

かおりが振り返る。

自分の肩を掴んでいる男を見る。見て……動画が鏡に映っているのかと、有り得ない事を考えた。「きっ……」

白く浮かび上がった彼の顔は、笑う。ピエロのように。そして。

「君は、 僕 の もの」

と、ポケットから取り出したキラリと光るナイフを、背後からかおりの首筋に……当てた。

第2話【クリス・マークス】

かおりには自分に何が起こっているのか、すぐに判断が出来なかった。

鏡の中に誰かが居る。そして、その人物に身を引き寄せられて後ろから自分の首に腕をまわされたかと思ったら、冷たく硬い物がかおりの首筋にピタリと押し当てられた。

それが鋭利なナイフだと分かった時。かおりは声を上げた。「い……いやあああ！」

肩にまわされた何者かの腕を振りほどく。かおりは前方へと転びそうに逃げたが……。

やはり、ベランダへのガラス戸の手前で前のめりに転んだ。そしてすぐに『何者か』の方へと体を向ける。かおりには信じられないものを、見た。

鏡の中から何の抵抗も無く、自然なように人が出てきたのだ。一人の、若い男。

格好、服装に見覚えがあった。というより、似ている。よく似ている。

動画の中で弾けて調子をとりながら遊ぶように歌っていた あのポーカー。

顔は全然違う。でも着ている衣服や、笑い方、取り巻く雰囲気こそつくりだ。本当に動画から飛び出してきたのではないかとさえ思うほどに。もちろん、ただの偶然の一致だろう。

重ね着したシャツにネクタイを締め、上から暖かそうなコートを。頭にも暖かそうな濃緑のニット帽を。そして日本人では無いというのか、金髪を……帽子の中に整えられ しまわれている。

肌が白い……照明が切れた部屋の中で月明かりがそれをよく表し

てくれている。

不気味なほどに……。

かおりに微かに笑いかけ、片手にはナイフを。構えず、手荷物のように持っている。

そしてかおりに ゆっくりと近づいて行った。

言葉を発しながら。

「君を愛しているよ。かおり」

語りかけるように。

「殺したいほど」

言い終わった後に、顔中に『喜び』が広がった。頬骨が吊り上がり目が小さく細くなって、出来たえくぼが非常に怖く。かおりの背筋を凍らせる。

怖、い。

かおりの奥歯がカチカチと鳴った。全身が震えて、目が見開ききつてしまつて彼から逸らす事が不可能になっていた。魔術にかかつてしまったのだ。畏に引つかかつたんだと。

「た、たすけて……」

目は離せずに、体は逃げようとする方を向いて何とか立ち上がるうと頑張つて動かした。不格好でも、滑稽でも、かおりは這いつくばつてもいいから、立ち上がるうとした。

ベランダのガラス戸にすがる。

窓から見える景色は かおりに何もしてくれない。

「助けて……」

男が忍び寄る。ガラス戸に両手をついて かおりはついに近寄る男から顔を背け、ベランダの下方を。

そうして気がついた。ベランダに足がある……。

黒い紐靴を履いたズボンの上方には。人の体が。要するに、誰かが外のベランダに『立って』いたのだ。かおりを見下ろして……そして迫る男の顔を見て。しかし……。

姿、格好が かおりを襲う男と これまた類似していた。かおりは呆気にとられる。

「やめろ」

高くも無く低くも無い、男の声。高揚を取り除いた声質は、何故か後ろから迫り来る男の声と似ている気がした。いや……。

かおりはガラスを挟み立っている男を見上げ よく凝視した。月明かりの逆光で暗いので分かりにくさがあつたのだが、笑っていないだけで男の顔は。

かおりに迫る男とかおりの前に現れた男は2人とも。同じ顔だったのだ。

「サイレント」

迫る男が言う。ナイフを持つ手は変わらずブランと ぶら下げて「かおりには指一本触れさせない。退け、ジョーカー」

無表情に躍動感の無い声で。相手を『ジョーカー』と呼んだ。

(『サイレント』……？ 『ジョーカー』……？)

かおりに疑問符が浮かぶ。それぞれは相手の名前なのか。そして知り合っていたのかと。

ジョーカーと呼ばれた男は舌打ちをする。「チツ……」

今まで笑顔だった顔が初めて歪む。少し眉間に皺を寄せ顔を横に逸らしながら吐くように台詞せりふを捨てた。

「これでまた3年、お前に罪の罰が下される。人間の寿命なんざたかが知れてるのになア、サイレント？ お前は一生、かおりとは結ばれない」

皮肉を含む笑い方で挑発した。それに乗って名前を呼ばれたサイレントの方は感情をあらわに叫んだ。

「黙れ！消えろ！」

「クククククク……」

言われた通りに、笑う男は後ろに後ずさって、鏡面に当たる事無くすり抜け消えていった。

かおりを襲う男は居なくなつて。ホツと見るからに安堵する様子を見せた かおり。ペタンと正座で、息を深くつき肩を落とす。「あ、ありがとう……助けてくれて……」

かおりはベランダに立つたままの男に お礼を言った。最初、何かを言いたげに かおりの顔を見て口を小さく開けてみたものの、すぐに目を伏せ……やめたようだった。

「どういたしました。……じゃあね」

少し寂しそうに口元を作った。かおりは それを見て即座に立ち上がった。もう震えも恐怖も何処かに行ってしまったって元気に。

ベランダへの戸の鍵を開け、勢いよく戸をガラガラ！ と引き開けた。「待って！ あなた達って！」

呼ぶ。

男はギョツとしたが何も言わなかった。

かおりは開けた戸から「ひとまず中に入って」と招き入れた。男が中に入ると、すぐに戸は閉める。

かおりはドキドキしている胸の内を悟られないように、男の顔を見た。目は真剣に。

「あなた達……何者なの？ 何処から来たの？ 違う世界から……来たの？」

鏡をすり抜けたりしているのを見ている。目の前に居る男も……ここは、この部屋はマンションの3階なのだ。上からも下からでも、わざわざどうやって来たというのか。

男は黙って俯き加減だった。言葉を選んでいるのか言うのをため

らっているのか。時折、全然違う一点を見たりして考えていた。
やがて重く口を開く。

「僕らは……沈黙世界から来た。決して、かおりの居るこちら側の
世界とは関わってはいけないと……掟がある」

ちんもくせかい……。

かおりの脳裏に再び『沈黙』という言葉が蘇った。

そんな世界が？

「でもあなたは助けてくれたわ。……何故？」

「それは……」

その時。

突然、2人を頭痛が襲った。「！」「うぐっ……！」

稲光が走り直撃したような衝撃で。2人とも場にしゃがみ
う
ずくまった。「痛いっ……！！」

苦痛の表情を浮かべ声に漏れた。

「何……！？」

すると、耳の中を突き頭に響くような蔽かな低い声が部屋中に降
りかかった。

『また禁を犯したな、クリス・マークス……仕様が無い奴だ』

「沈黙の神……」

クリス・マークス？

沈黙の神ですって！

かおりは頭を押さえながら、降りかかる声と彼との会話のやりと
りを黙って聞いていた。

『お前に罰を与える。あと3年……それが加算され、残り6年。残り6年を、お前はまだ私の世界の下で過ごすように命ずる』

「……はい」

頭痛はゆっくりと消えていった。力無く、彼は返事だけを。

かおりは よく理解がまだ出来なかったが、悲しそうにも見える表情の乏しい彼に同情の念が芽生えた。

でも、どうしてあげたらいいのかわからないから困る、と。かおりは彼の様子を見守るしか無かった。

すると天からの 沈黙の神の声は嘲るあざけように、今度は かおりに語りかけた。

『ふ。娘。教えてやろう……クリスの運命と、お前に襲いかかる悪魔の正体を』

「……！」

ハツと驚いたのはクリスと呼ばれた彼の方だ。顔を上げて天を見た。

『お前を愛したクリスは、お前の為に複数の禁を犯す』

私の為に？

かおりも天井の方を見上げた。誰かが居るわけでは無い。

「やめる……」

クリスを見た。目は何処かを注視し少し声が震えた。

『一度禁を犯せば3年。お前がクリスに救われたのは今回で4度目である』

「やめてくれ！」

『皮肉なものだ。かおり、お前はクリスの想いに気がつかない。なのにクリスは想いばかりが成長し続けて』

「やめる……ッ……！」

『自分の中のジョーカーを生み出し自分と戦う羽目になった。馬鹿な男だ』

クリスの叫びは かおりの心に届く。

かおりの前には、小さく うずくまって耳を塞いでいる男がひとり。

沈黙が2人を包む。神はもう何も語りかけては来なかった。

シーン、とも キーン、ともとれる静けさの音が脳天の端々まで染み行き渡り。

2人を苦しめ、呼吸さえも満足に許さない『沈黙』が。

かおりの苦手な『沈黙』が。

……訪れる。

かおりは次の自分の するべき行動を見失って気持ちちが奔走していた。あの消えた男のように笑えばいいのか、気持ち悪いと怒ればいいのか、泣けばいいのか、それとも……。

だから、『沈黙』は嫌いよ。かおりはそう叫びたかった。

「さっきの男は、もう一人の……クリス？」

かおりが恐々と話しかけると、クリスはガバツと身を起こした。

「！」

あまりに突然で後ろに尻もちをついてしまう かおり。立ち上がったクリスは開き直った顔で、少し赤らめながら、

「ごめんなさい、かおり！」

と、かおりを見もせずにガラス戸に突進して行った。

戸にブチ当たる事は無く、そのままガラスに溶け込むように姿を

消した。

そして小さな奇跡が起きる。

鳴らないはずの、ベッド脇に置いてあったオルゴールが頼りなく鳴り始めた。

小さい音だけれど、沈黙の後の部屋に可愛らしく響く『サイレン』。ラッパを吹く兵隊の人形が、音を奏でている間は回り続けている。そしてその曲は動画の曲とも恐らく違う、かおりには聞いた事も無いメロディだった。

一曲一通り鳴らした後……またオルゴールは静かになってしまった。

第3話【ミラーイリュージョン】

外では変わらず黒いピエロが、都会の何処かに やって来る。
足音も立てずに……。

かおりが今勤める小さな製紙会社のオフィスビル。

かおりは、一階の化粧室で手を洗う。後ろでは同僚達 何人かが、昨日観たテレビの話や上司への不満を好き勝手に言いたい放題である。

しかし かおりの耳には一切情報は入って来なかった。そんな事より、昨夜の出来事の方が大事おおごとだったからだ。2人の……

かおりを襲った男 と かおりを助けた男。

ジョーカーと呼ばれた男 と サイレントと……。

それぞれはクリス、という同一の人物らしい。

『お前を愛したクリスは』 沈黙の神とやらが、かおりに言った。

『お前がクリスに救われたのは今回で4度目』 4度も？

キユ。

水道の蛇口をひねり、流していた水を止めた。

鏡に映った自分を見つめる。化粧をされた、外での自分の顔を。

(知らなかった……私が、誰かに見守られていたなんて)

しかも沈黙という名の世界の住人。この世の者では無いのだ。鏡など一枚を隔てて、彼らは行き来できるらしいが……それをしてはいけないという、掟がある。

(いきなり愛しているなんて言われても……私は、どうしたら)

掟を破ってまでも、かおりを助けにやって来てくれていたという。

かおりには全然身に覚えが無かった……可哀想な事に、と。神はそれが皮肉だと言った。かおりは、罪悪感という念にかられっ放しで参ってしまった。

(いつ、彼に助けてもらっていたんだろう……子供の頃かな……?)
鏡の中の自分を見続けて、姿を通して子供の時の自分を想像した。子供の……。

するといきなり、自分の顔が全く違う顔へと化けた。

「……！」

かおりは思わず声を上げそうになるのを堪えた。心臓がドキリと打つ。

鏡の中の住人はニヤリと笑う。

ジョーカー……！

昨日、散々見た彼の顔だった。「ひっ……」小さな悲鳴を上げた。あの顔を見たくない。「どうしたの、かおり!？」

……。

同僚の一人が悲鳴を上げたかおりの肩を揺さぶる。

「かおり?」

「ピエロが……」

意味の分からない事を口走る。同僚は、かおりが見つめる先の鏡を見たが、すでに何の変哲も無く普通に かおりと同僚の姿が映っているだけだった。

(ピエロ……ピエロ!)

おかげで、かおりの脳裏に ある一つの不思議体験が思い出された。

それは かおりが小学5年生だった頃まで遡る。さかのぼ春の遠足で、学

年全員で遊園地へ出かけた時の事だった。

日が高く明るい内から、何処かの劇団かサーカスなどを呼び、盛大なパレードを行っていたのを覚えている。マスコットキャラクターや、王子やお姫様などが出入り口・園内で子供達の相手をしてくれている。その中で派手で奇抜な衣装を纏ったピエロまが居たのが印象に今でも残っている。ただの普通のピエロで、裏の顔や怖さといった そんなものは無い。

かおりはとても内気で、よく男子から からかわれていた。同じ班の男子からも。

他の女子が居ない隙に、同じ班の男子達が かおりを呼んだ。そして男子達は半ば強引に。園内にある、壁が全て鏡張りで行った迷路『ミラーイリュージョン』へと、かおりを連れて行ったのだった。そして男子の皆に わざと置いてきぼりにされる かおり。

かおりは泣きそうになっていた。迷路内は人気が無いのか、閑散としていて人は少ない。歩いても歩いても、人と会う事が さっぱり無かった。周りには不安そうな顔の かおりが鏡の数ぶん映って見えるだけで、余計に怖くなってしまうのだった。

どうしよう、このまま一生ココの中に閉じ込められたら。

皆 意地悪だ。どうして私がこんな目に遭わなきゃならないの…

…。
かおりはついに泣き出した。

たすけて。 たすけて。 たすけて……。

誰でもいいからと。この場に居るはずの無い母や父の名前を呼んだりした。
すると。

「こつち。右！」

……男の子供の声がした。知らない子の声。「……?」
かおりは顔を上げた。涙で視界が滲にじんでいる。よくはつきりとは
見えない。

「聞いて。右だよ、そっちからみて」

声が何処から聞こえているのか……? でもそんな事は今の
かおりには どうでもよかった。

ただ、声の指示通りに進んで行くだけで。

「そう。次の角を左に曲がって」

「行き過ぎだ。一つ戻って」

声は正確に、かおりを導いて行く。まるでココが自分の住み慣
れた庭なんだと言わんばかりに。

かおりはもう泣かなかった。小走りに、出口を目指して。
声を信じて。

「さ……この道を真っ直ぐ行けば、ゴールだよ」

かおりは最後の真っ直ぐな道を……駆け出す前に後ろを振り返る。

「……」

誰も、居ない。

誰が……。

かおりは、嬉しそうにニコッと笑った。「ありがとう」

向かうはゴール。かおりは笑顔になって、皆の元へ……。

……そして思い出となって、かおりの記憶の引き出しの奥へしま
われていった。

(きつとあの時の男の子だったんだ……)
かおりは思った。

(あとの2回は、いつ……?)

とても思い出せそうに無い。やっと一つを思い出せただけだった。

今、かおりは少し先輩の同僚となる男の車に乗っている。まだ新人で分からない事だらけで、失敗も多いかおりをいつも長い目で見てくれている、面倒見がいい男。名前を新田にったといった。女性社員の誰からも熱い支持がある。かおりも まんざらでも無かった。

帰りがけに一緒にどう、と。新田の方から声をかけられ、ちょうど小降りの雨が降ってきた所だったので。かおりは誘いに乗った。特に何というわけで無く。ただ一緒に帰るだけだった。

車を走らせる。車は道なりに、視界が良好で無い雨の中を突き進む。

国道の途中の交差点で信号待ちをしていて。今まで好きな音楽やテレビ、話題の芸能人の話などで盛り上がっていた2人に。

突如『間』が空いた。

「……………」

「……………」

車が動き出す。窓からの風景が全て流れて後ろの方へ。助手席のかおりは、嫌な感じに襲われた。

沈黙。

(どうしよっかな……何か話題は……)

もう話す事など無い気がしていた。早く家に着かないか……そんな事を外を見ながら考え出していた。

「綾野さん」

「え？」

呼ばれて、慌てて新田の顔を見た。運転中の新田は前を見るしか無かったが、たまにチラツとかおりを横目で見ている。

「よかつたら……この後 一緒に食事でもどうかな？」

……。

無言のかおり。返答に困ってしまっていた。「どう？ 予定ある？」

かおりが答えられない理由は……。

車のサイドミラー。かおりが居る助手席側の方。

かおりはギクリとして体が凍りついてしまったのだった。

クリス……！

観ていた動画のシーンのようだ。踊って歌っているわけでは無いのだが。ミラーの面積 中央に彼が映ってこつちを見ている。昨日と今日と同じ格好同じ服装で、かおりを見ている。

表情が無い。

あなたはジョーカー？ それともサイレント？

……

かおりと目が合ったかと思ったら、ニコツと……嬉しそう？ に笑った。何故か笑っていた。

(クリス……)

かおりの気持ちが揺れた。「綾野さん……？」

新田は、心配そうにまた声をかけた。

「ごめんなさい……悪いけど……また」

とてもこのまま男と食事など、楽しめる気分では無い。そう思っ
てかおりは断るしか無かった。

「そう……じゃあ、また別の機会に誘うよ」

新田は残念そうに。それから気を取り直して違う話をし出した。

かおりは新田の話に笑う。先ほどの『沈黙』が嘘のようだ。車内
は再び明るいムードへと。かおりには大変ありがたい事だった。

頭の片隅にクリスの笑顔がチラつく。何故あなたは笑っていたの、

好きな女が別の男に誘われているというのに……と。

もうミラーの中は沈黙が過ぎ去った時と共に、通常の景色へと戻っていた。

かおり達が談笑していると時間はあっという間に過ぎていくよう
で。車は かおりの住むマンションの前へ停まった。

「ありがとう、送ってくれて。今日は断ってしまつてごめんなさい。
また誘つてね」

かおりは車から降りた後、新田に窓越しで笑いかける。新田も、
陽気に かおりに手を振った。「おうよ。またね、綾野さん」

車は発進する。かおりは小雨の中、傘も無いので急いで建物の中
へ入る。

エレベータが上の階から降りてくるのを待ちながら、髪の毛から
滴り落ちる水滴の行く先を見ていた。ポタ、ポタ……と。地面を丸
い水沫で染める。

(何故 道化師は笑うのだろう……)

遊園地で会ったようなサーカスに居るピエロとは、わざと おど
けて客を楽しませるけれど。かおりは何故か気になるワードの中に
『道化師』も入れる事にした。沈黙、ピエロなどに続いて。

(何故 道化師は……)

仕事だからじゃないか、と何処からか野次でも聞こえてきそうだ
った。

クリス、あなたはきっと、私を悲しませない為に

……そう答えが行き着くと、悲しく切なく。エレベータの出入り
口が開き、かおりを中へと招き入れてくれた。

かおりを家まで送り届けた後。新田は、自宅に着いた。

新田もマンションで一人暮らしをしている。白い壁の、特段変わった所も無いありふれたマンション4階の一室。新田は部屋に入っ
てすぐ電気を点けた。

ところが、点かない。

「あれえ……」

何度か力チ力チとスイッチを試してみても、全く照明に反応が無
かった。

困る新田。懐中電灯を、と取りに行こうとして あ、と嫌な事に
気がつく。

そういえば乾電池が切れて無かったか。……

新田は仕方無く、玄関に向かう。放り投げた上着を拾い掴みなが
ら。近くのコンビニへと仕方無い、面倒だが行くかと、玄関のドア
を開けた。

ガチャ。

ドアが新田から前へ開くとすぐに、『人』が姿を現した。

「わ!？」

急に居たと思い、驚いて相手に謝る。「すみません、どうも……」
頭を掻きながら相手を見ようとすると……。

ガシリ。

……。

いきなり、玄関に足を踏み入れられ新田の顔面を片手が掴んだ。

「……ッ!」

突然の暗闇に、新田は もがいて相手の掴んでいる腕を自分から
引きはがそうとするが……。

ブスリ。

気持ちの悪い音が新田を襲う。自分の腹に ゆっくりと熱いものが伝わってきた。すぐにそれが、痛みへと変わる。「ぐ……ぐ……」
ブスリ。もう一度。「……」
もう……。

バタンッ！

玄関の重いドアは勝手に閉まった。
不協和音、不協和音程にも聞こえる音。外の雨音をバツクコーラスに奏でている。観客は誰も居ない。

翌日、腐臭がすると見に来た隣人によって玄関のドアが開けられ、見るも無残な姿で新田は発見された。
マリオネットのように、体をくねらせて。

黒いピエロは何処でも笑う。

第4話【密会】

新田が殺害された

最後の接触者だと、かおりは警察から事情聴取を受けた。もちろん、かおりには犯人の事など知る由も無い。何を聞かれようとも、自分の知っている限りを素直に答えていくだけだった。

警察の男の一人は、かおりの返答を自分の手帳にメモする。書きながらチラ、チラ、と。かおりの機嫌を窺っていた。

もう一人の男はテーブルに両肘を置き両腕は組んで、隣で懸命にメモをしているさまを見守っていた。

2人とも30代で、前半と後半コンビといった風に見えた。

かおりは自室のリビングに2人をテーブルにつかせ、買い置きしていたダージリンティーをカップに淹れて勧めた。「はあ、どうも」紅茶よりコーヒーの方がよかったかしら、と かおりは思ったが、長居は されたくないからと紅茶を選んだ。案の定、2人ともばつが悪そうに紅茶を飲んでいる。紅茶を優雅に飲む事など、得意そうでは無かった。

「あの……新田さんですが。……どんな殺され方をされてたんでしよう?」

かおりは新田が殺された、とだけしか知らない。そして新田という人物が他人に恨みを買うような人物だとは到底思えなかったのだ。まだ今でさえも、信じられずにいる。

「聞かない方がいいんじゃないですか……ってな具合です」

カップの中を空にし、適当に答える。おかげで かおりは どんなひどい有様だったんだろうかと、勝手に想像するしか無い。

「では そろそろ」「『黒いピエロ』には くれぐれも注意して下さいね。まあ、夜道とか」

刑事2人が立ち上がりながら、かおりに言った。

「黒い……」

かおりは少し別の事を思う。動画の事だ。事件とは関係無い。

「ま、犯行が全て同一かどうかも分かんないんですけどね。全く誰が黒いピエロだなんて呼び始めたんだろう。芸術家か。奴らは何でも美化したがる」

メモしていない方の刑事は、よく文句を言う。話さなくても別によい事を。

「怖い……」

かおりは組んでいた両手にハア、と息を吹きかけた。

もう外は暗い。だいぶ暖かくなっただとはいえど、時々騙されたように突然冷え込む事もあり、防寒着などには就寝の時など注意がまだ必要だった。

「や。夜分に失礼しましたね。もう一度言いますけど、黒いピエロには十分気をつけて下さいね。奴は何処でも、どんな相手でも斬り刻みまくりますから。別名ジョーカーなんて呼ばれる事もネットであつたみたいですけどね。フザケタ者、って意味で。それにはこちらでも同感ですが」

「はあ……」

「こら高橋。しゃべり過ぎだ。それでは綾野さん。ご協力ありがとうございます。また何か思い出した事がありましたら、すぐに連絡を。何しろ類似の手口の犯行が続きますので、一人の時などには細心の「ご注意を」

「はい……」

不安そうに玄関まで刑事2人を送り届けるかおり。帰った後、かおりはさつき高橋と呼ばれた刑事の言葉に反応していた。ずっと頭の中に巣くっている。

「『ジョーカー』……」

クリスの片割れの方も、『ジョーカー』……『フザケタ者』。

かおりは、気になるワードの中に、この言葉も入れた。

刑事達が飲み終わったカップを片付けた後、かおりも自分に熱い紅茶を淹れた。それを運び、パソコンを開く。

かおりが今飲んでいるのはジョルジだ。深い橙色。甘味がかおりの口いっぱい広がる。夜なのでカフェインを気にしたが、どうせしばらく眠れそうにないしいいか今夜は、と。恐らく無残だった新田の最期を思い、かおりは苦しく心を痛めていた。

パソコンをたちあげてみたものの。あまりキーボードを打つ気分でも無かった。まだあまり慣れてもおらず。使う目的も調べ物かサイト閲覧ぐらいだ。「はあ……」

何度ため息をついても、晴れない気分がかおりを苦しめる。何でもいいから何か検索してみようかと思つた時、手が勝手に『ジョー・カー』と……。

……打つておいて、すぐまた消した。

並ぶ『ジョーカー』の字の配列なんて見たくない。検索結果で同じ言葉が並ぶなんてゾツとする。かおりはそう気がついてブンブンと頭を振った。

「しつかりしよう。落ち込んでばかりだわ」

せっかく紅茶を淹れてしまったけれど、メールチェックだけしてもう寝よう。そう思つてかおりはパソコンのメールボックスを開いた。

一通、受信しましたと通知した画面。

誰だろう？ と早速開けてみた かおりは、身が固まった。

『 かおり。』

……。

そのみ。

「クリス！」

かおりは叫んだ。

部屋中に声は響き渡る。ガタ、とかおりはイスから体を立ち崩した。

(どつちのクリス……？ ジョーカー……？ それとも……)

これだけではわからない。かおりはドキドキと高鳴る心臓を手で押さえた。もしジョーカーだったら、怖い。だけど……。

脳裏に、動画のボーカーと、車のサイドミラーに映った彼の姿が重なってかおりの心臓をますます締めつける。あの裏の無い笑顔なら、かおりは安心して受け入れる事ができる……と。

そして自分もクリスに会ってみたいと。

クリスは私に会いたがっている。会いたくて苦しんでいる。

でも私はクリスの事を何も知らない。知らないの……。

かおりはキーボードの前に座りなおし、字を打ち始めた。

カチカチカ……。

かおりもシンプルに、気持ちだけを。

『クリスに会いたい』

そして改行して、

『どうやったら会えるの 罪を増やさずに……』

……打った後、両手を固く握り込めた。馬鹿な事を聞いているよ
うな気がした。

罪を増やさず私と会う方法？ そんなものがあれば とつくにクリスは実行しているんじゃないのかと。それができないからこんな

に苦しんでいるのだと。

「クリス……！」

あなたを好きになる為に、あなたの事をもっと知りたいの。

かおりはキーボードを前へ前へと押しやり、デスクの上で頭を伏せて。涙目を隠した。そしていつの間にもやらうたた寝をしてしまっていた。

画面では、かおりの打った文章がそのまま残っている。字の続きを求めて、カーソルがピコピコと点滅している。……

……

カタ……カチ、カチカチ、カ……

静かにひとりでに。キーボードは何者かの『意志』によって、字が打たれた。姿は何処にも無い。

かおりはスウスウと、寝息を立てて眠っていた。

深夜に。かおりはハツとして身を起こした。少し寒気がする。うたた寝をしてしまって体を冷やしてしまったようだ、自分のうっかりさに呆れた。

そして画面を凝視する。しばらくボウツと画面に見入った。何かを書き込まれている。

『沈黙の神に見つからなければ いい』

「……………」

(クリスだ……)

すぐに分かる。確かめるまでも無い。

クリスの書き込みは後、沈黙世界の掟について触れていた。

かおりは一読した上で、震える手で自分の元へと再びキーボードを引き寄せ続きを打ち出す。

打ち込んだ後、かおりはしばらく考えた。沈黙の神は、もしかおりとクリスが接触したと分かれば、クリスに3年の罰を与える。クリスは罰を受けてしまう。

普通は、沈黙世界で生まれた子供は15歳になると自立して、こちらの世界へ来る事になるらしい。

普通なら、だ。

クリスは4度、掟に逆らった。すなわち、“こちらの世界と関わってはいけない”に、触れたのだ。

かおりを助けた、そのせいで。15歳にプラス……クリスが27歳にならないと、かおりの居る世界に来られない。あと6年だと、神は言っていた。

あと6年……会う事を我慢すれば。そして。

沈黙の神の目を盗んで会えば罰は科せられずに、済む。

そうクリスは教えてくれた。でも目を盗んでって、どうやって？

かおりが書き込むと今度はすぐに。キーボードの音を立てて書き込みが自動的にされた。かおりは始め、びっくりして盤を見ていたが、やがて音が静かになると怖々視線を画面へ上げる。

『簡単な事だ 僕は気がついたよ』

『沈黙が無い所へ 行けばいいんだ』

かおりは早速、すぐにクリスをダンス・バーに誘った。繁華街の一角にあるバーで、かおりは一度だけ友人に連れて来られた事があった。ココなら夜通しお祭り騒ぎができる。

かおりは結婚式以来、着て行った事の無い、青のシンプルスレンドーロングドレスに身を包み、首元には3連ホワイトパールのチョーカー、合わせて耳にパールのピアスをつけて。白レースビーズのサテンロンググローブをはめ、15センチも、かかとの高いヒールを履いた。

上から白いファー付きのロングコートを着て、ブラックスパンコールのクラッチバックを手にはぶらさげている。

慣れない格好をして、緊張している。かおり。記憶を辿り、クリスと待ち合わせたバーへと足が進む。バーの入り口は地下にある。レトロな煉瓦造りの壁を伝い、階段を下りていく。

粗い木造りでできた入り口のドアを開けると、暖かい熱を持った空気がかおりに流れ込んできた。

そして……。

「かおり」

開けてすぐの暗がりの通路で。

一人の男が寄りかかっていた壁から離れ、かおりを呼んだ。

「クリス……」

あまり変わらない格好。

渋めの薄緑色のシャツに同色に近いネクタイ、上に青いデニム地の前開きシャツを重ね着、首元にゆとりをもたせて巻いた新緑色の手編み風マフラーを。黒の紐靴、茶色のズボンを履き、そして暖色ピーコートを着ていた。

頭には前と同じ深い緑のニット帽。手も同じく指先カットのもの

をはめていた。どうやらクセなのか、彼はいつも両手はコートのポケットに入れている。

「他に服を持ってなくて」

照れ笑い。

「かおりも少し笑った。「そんなの、気にしない。しないわ」……履き慣れない靴で、クリスの元へ。」

2人、寄り添い。そしてひとまず通路の突き当たりを曲がり店内へと歩く。

ギョワアアンツ……！ 轟音のような音が震動で襲う。

入った店内は熱気と活気と音楽で盛り上がっている。客は皆、身軽で軽装だった。

カウンターが長く奥まで伸び、中央に設置されていた床のツルツルした丸いステージの上では何十もの派手な服装の人間が、腰を振り腕を振り回し、音やリズムに合わせて踊る。個々のメチャメチャな個性的パフォーマンス。ラッパー風の男の集団が居て、場を占領しエントリーやパワームーブといったブレイクダンスを披露していたりする。

屋内も暗いが、通って来た道からずっと暗めで、色のついた照明は明るく観客達の気分を沸かせる脇役をかって出るように動きまわっている。

かおりはコートを脱いだ。そしてボーイに案内され2人はステージからはほど遠い4人掛けのソファ席についた。

腰を落ち着けると、クリスがかおりの方をジッと見ていた事に気がつく。「何？」

「ごめん！」

クリスは焦ってかおりから視線を逸らした。訝いぶかしがるかおり。「教えて。どうしたの？」

身を乗り出す風にして、隣に居るクリスを正面から見ようとした。

クリスは恥ずかしそうに、ゆっくりかおりの顔を見て はにかみながら笑った。

「かおり、綺麗だ」

「……」

聞いたかおりも、照れてしまってクリスを見ていられなくなってしまうた。

通りがかったボーイに、カクテルを注文する。

「お酒、飲んだ事 無いけど」

「私もあんまり。紅茶ばかりで」

メニューを見てズラリと並ぶ、マティーニやウオッカといった力タカナ語を見て。2人は同じ物を同時に指さした。

フルーツカクテル。

……

「ぶ……」

腹を抱えて嘔き出す2人。「そんな西洋人みたいな身なりなのに……」かおりが、さらに笑う。

「僕、沈黙世界人だよ」

弱った顔で肩をすくめた。「そうよね」かおりの笑いは止まらない。

やがてクリスは かおりの手をとった。

「クリス？」

冷たいクリスの手。かおりには意外だった。

「かおり……僕、嬉しくて。こっちに来た時から……どうしていいの、わからない」

下を見ている。とても自信無さげに、膝の上のかおりの手に触れ

ていた。口元は微かに、力無く、……笑って。
かおりは。

「踊ればいいんだわ」

立ち上がった。

クリスの手を引っ張る、かおり。「行こう！」

第5話【約束】

クリスは驚いてかおりに引つ張られるがままに。ステージでは、先ほどまで騒がしかったストリートスタイルの若者達の姿は無く、パーティードレスの女性やランニングシャツといった暑がりの若者がポップポップのテンポによく。体が反応するがままに調子の音波おとなみに乗っている。

歌は洋楽なので歌詞は理解できなかった。しかし気にする事は無い。

「来て、クリス！」

先に飛び出したかおりが踊り出す。両手をグーに、足でテンポをとって。

クリスの前で、回ってみせる。

クリスマスも、真似するように踊り出す。

周囲の客と一緒に。

音楽と一緒に。

照明の光と一緒に。

自分が どれほど恋焦がれても、決して手の届かなかった……かおりと。

腕を振り回して。手を広げて。

かおりの手をとって。

光と音と熱の空間の中で2人は。

まるで永遠の時を過ごすように いつまでもいつまでも……踊り続けた。

ずっと、ずっと。

次の、次の曲になっても……

……

やがて。休む暇も惜しんで踊り続け疲れを感じてきた2人は、次の曲へと変わるのを機に一方が話しかけるに至った。

「休もうか、かおり」

「うん」

2人、仲良く手を正面から組むように繋げて、席に戻るまでは決してお互いの手を離さなかった。それがまた、2人にとって自然なように。

今度はソファ席では無くカウンター席に並んで座る。またフルーツカクテルを注文した。

かおりは まだ興奮が冷めきつてはいない様子で、カウンターに大げさに突っ伏してみせる。そして横を向いてクリスに笑いかけた。「ああ楽しかった……」

クリスも片肘をつき傾げた首で、かおりを眺める。かおりの一挙一動が、クリスの心を騒がせずにはいらなかった。何なら、今すぐにだって

「そうそう、クリス。私、思い出したのよ」

ドキッと、クリスは我に返った。頭を横に軽く振る。そんな仕草に、「どうかした？」と かおりに聞かれて。恥ずかしさを見られたくない、クリスは鼻をこする振りをして顔を逸らしながら「何でもない」と返した。目は天井を。かおりは不思議に思ったが、気を取り直して再びクリスに問いかけた。

「思い出したの……あなたが私を助けてくれた思い出」

無言でクリスは かおりを見つめる。

「私を遊園地のミラーイリュージョンで、助けてくれたでしょ？
……違う？」

「……」
クリスは、何処かホツとして相槌を打った。そしてニツコリと笑う。「そうだよ」

「やっぱり。私も あなたもまだ子供だったのね……あの時、本当に嬉しかった。思い出せてよかった……でも」

途端に顔を曇らせる。

「……馬鹿ね。そんな事で、3年も……」

「本当だ。自業自得だね」

クリスがそう あっけらかんと返してくれたおかげで、かおりの曇った表情が解けた。

「ふふ」

つい、笑みがこぼれてしまう。

すると、注文したフルーツカクテルが2人の前に一つずつ順番に置かれた。少しずつ飲んで、かおりは話を続けていく。

「……でもね。あとの2度が どうしても思い出せそうに無いの……。ああ私って何て記憶力が悪いんだろう。情けないよ。頑張っあなた的事を知ろうとしているのに。どうしてなんだろう……」

クリスは笑うのをピタリと止めた。「ねえ。教えて？」

しかしクリスは黙っている。

黙って、カクテルの入ったガラスコップに付着して流れる水滴を見つめていた。

(クリス……?)

かおりの胸が騒ぐ。どう見たって、触れてはならない事柄に触れてしまったと、かおりはそう感じた。これも突如訪れた変な沈黙といえるのか。

「……僕にも君にも、知られたくない思い出したくない事がある。だから聞かないで」

そんな風にクリスは言った。少し、寂しげに……。

「ごめんなさい……」

「気にしないで！ 君が悪いわけじゃないんだ。悪いのは僕だから」
慌ててかおりの前で大きな声を上げるクリス。落ち着かなく、カクテルを一気に飲み胸を張った。

かおりの中に、じんわりとした想いが こみ上げる。クリスのする事 言う事 なす事が、全て愛おしくてたまらない。かおりはギョツと自分の丸めた手に、そつと……口づけた。

「ありがとうクリス……優しいんだね」

クリスのハツとした顔を、かおりは一生離さない。

……一方、同時刻。

かおり達の居る繁華街の他、都会のすべてを自分の足元に置く事のできる高層、上空で。

空は黒く白い雲すら黒く、夜という名の帳とほが下りて地上のものを天という神は支配する。その下では都会のイルミネーションが、天や神に逆らい人々を墮落させ、眠る事を許そうとはしなかった。

自分の足元に街が。人が。生物が、建物が。『時間』が……存在する。高層ビルの頂上、屋上で。絶対に飛び越えるなど言わんばかりの高さの手すりの上に乗る、立って空をも含む地上を地平線の彼方まで見渡し目を細める男が一人。

彼もこの世界の中では ちっぽけな存在にしか過ぎない。

下方を見下げる。

男は、一点を見下ろした。

幾十ものビルや店が整列し、点々とした光を星のように瞬かせて色めいている、広い大街並みの中で。

地下で隠れて見えはしないが、かおり達が居るバー。肉眼では見えないはずの無い距離の高さから、男は確実に かおり達を見ていた。
楽しみに ひとときを過ごす、かおり達を。

ただ……見ていた。

コートの中に両の手の平を突っ込んで。
彼は白い息では無く言葉を吐く。

「罪な女だ。またクリスの心は加速する」

男はニヤリと笑う。快樂のように。

そしてグラリと体を前に。……そのまま墮ちた。

何のためらいも恥じらいも無く……手は両方ともコートの中にしまわれたままで。

ドミノ倒しのドミノのようだ。

下降する。夜の闇の中へ。ドブ底の中へ。……笑いながら消えた。

少し都心からは離れた、廃虚と化した寂れたビル。^{さび}シンと静まり返った屋内の至る所には、崩れ落ちた天井の一部や壁から剥がれた塗装が、居るはずの無い人間の代わりに落ち着いて居座っている。

誰も……居ない。犬ころ一匹、居やしない。

誰も居ない。人間は。

人間は。

生きている……人間は。

廃墟を写すカメラは、ビルの建物の奥深く。上の階へと静かに移動し、ある部屋へと進む。

月の光に差しこまれて部屋の中は、昼とは違った質の明るさを演出し暗さを持つ者を仲間に誘うように優しく導く。例え先に何が待っているとも。

白い薄汚れた壁の絵画にされるは、女性の亡骸。^{なきがら}まだその肉体は若く、絶命して間も無い。魂を入れなおせば まだ間に合うと言っ

たとしても。それは所詮 無理な事。女性の目は閉じ首は力を失い垂れ、両手両足は十の字を表す格好で。

『磔』^{はりつけ}にされていた。

不思議な事に、切り刻まれては いない。

体が ずり落ちないようにと最低限に杭が打ち込まれているのみで、切り傷は一切無い。異常ではあるが、異質である感がする今殺人。

『黒いピエロ』の凶行。

杭の打ち込まれた箇所から壁伝いに流れる新鮮な血は、何かを表すのか。

犯人本人のみぞ知る。

女性は かおりに背格好がとてもよく似ていた。

朝の7時。高い音でピピピピと、ベッドの脇に寝る前に置かれた、目覚まし時計が軽快に鳴る。そんな明るさは裏腹に、かおりは少し頭を重く感じてベッドから起きた。

「う……」

泥酔はしていないが。睡眠不足がたたっている。かおりは早朝、朝日が出る前までクリスマスと共にバーに居たのだ。夜通し覚悟の上で、クリスマスとの時間を。

朝になれば仕事に行かねばならないと分かっている。かおりは早朝、

かおりは、9時までには会社に出社しなければならない。

「はあ……」

悪いのは、自分。クリスマスじゃないんだ、自分がこの日を選んだんだから、と。

かおりは両手を高く天井に向かって伸ばして、グリグリと上半身だけを捻った。少し運動をしただけで、だいぶ活動がしやすくなっ

たと感じた。「行かなくちゃ！」

ベッドから離れ、テレビをつける。そして台所へ。

朝はいつも紅茶を飲む。収納スペースの一部には、多種の紅茶が山積みだ。かおりは棚の前で一瞬だけ思考をし、片手に一種の紅茶パックを取った。

『キャラメルティー』。……かおりが紅茶に砂糖を入れないのは、甘い紅茶を好んで飲むからである。

クリスと別れる前。

紅茶の話をすると、かおりはすごくおしゃべりになってしまった。クリスの前でも。

時間を忘れる。忘れてしまいたかった、最後まで。

かおりはフト、朝が来たら会社に行かねばならない事を思い出してしまった。カウンターで、底に数センチほど残っているフルーツカクテルを悔しそうに見ながら。やり場の無い気持ちに、嫌気がさす。

つまらない事を思い出したおかげで、クリスに話しかける口数が少なくなってきた。

このままでは、このままでは、来る。沈黙という、怪物が……。

かおりは、下口唇を噛んだ。

「かおり。今日は楽しかった」

ギクリ。かおりはサツとクリスを見た。

まるで顔色を読まれてしまったかのように、タイミングが良過ぎだと思った。

「朝から仕事だね。じゃあ……もう帰らなくちゃ」

ニコニコと笑いながら、底に残っていたカクテルを飲み干したクリス。カランと、残された氷が軽く音を立てる。

分かっている、悲しかった。「うん……」

会計を済ませ、クリスの後ろについて行く。店を出た2人は、外を出たすぐ隣にあるガラス張りの店の前で立ち止まった。

陽気な男達が酔っ払って肩を組みながら歩いていたり、数メートル離れた場所の道隅で若者の集団がしゃがみこみ、たむろっていたりと。辺りはまだ夜の暗さでライトが目立っていたが、あまり静かでは無かった。

その方がかおり達にはありがたい。沈黙の神に見つからずに済むからだ。……

少しの間の後、2人はお互いを見つめあった。横のガラス窓には、2人の姿が映っている。どちらも名残惜しむかのように、黙って突っ立っている。

しかし堰を切ったように話を切り出したのはクリスの方だった。

「ココから帰るね」

また、笑う。

「そう……だね。うん……」

かおりも、微かに笑う。俯き加減で。

「次、いつ会える……?」

勇気を出してかおりは聞いた。今のかおりに出せる、精一杯の勇氣だった。

そして、怖かった。

次なんて、あるのだろうか。

「また、沈黙の神の目を盗めそうな頃合いを見計らって君に知らせるよ」

クリスの片手が、かおりの頬に優しく触れる。

触れた頬を伝うもの。それは涙だ。かおりは本人の自覚も無く、涙を流していた。

もう、行ってしまふのね。

目がそう、言ってしまった。

「かおり」

クリスの声がかおりを包む。

それは自然だった。時の流れのように。

クリスは、かおりに口づけを。

別れと、再会の約束の意味のキスを。

「それじゃ……………」

クリスは笑顔で……………ガラスを通して、消えて行った。行った……………。

「……………」

かおりの足元を、冷たい風が塵くずと共に走り抜ける。

かおりは手を組み、胸の前で息を吹く。

クリスが好き。愛している。

動画の中で、かおりにピエロと称された男がクルクル笑いかけながら、おどけている。

“ 何故 笑うの ”

“ それはね、君を悲しませたくないからさ ”

第6話【殺人鬼】

最初に『黒いピエロ』と名をつけられてから数年か。裏で『ジョーカー』とも言われた事のある殺人者は、まだ捕まってはいいないのか。さてはすでに捕まっているというのか……そしてまた別の、新たな殺人者が生まれているのだよという隠されたカラクリなのか。殺人は繰り返される。都会の街で、人々に忘れられる前にと殺戮は続く。

人の恐れが都市の伝説を生み出したように、彼は何によって生み出されたというのか。

何処か暗い所から、歯を見せてニヤリと横に吊り上げられた口元の。名前をもらった殺人者は笑いながらこう漏らす。

人の闇。沈黙からボクは生まれた。

……

今日も何処かで 彼は忙しい。

「……でさあ。アイツつてば、最後にこう言うわけ」

「何なに。なんて」

「『ぼーいずびー、あんびしゃすー!』」

「意味わかんねえええ!!」

ゲラゲラと、場は盛り上がっていた。

居酒屋で今日は同僚達で集まって飲み会だった。3手に別れてお座敷を貸し切り、同時に乾杯の音頭をうたって酒を皆、飲み始めた。牛スジ、イカゲソ、軟骨、鶏唐揚げ、エビチリ、キムチ、……ラー

メンなど、つまみが各テーブルの上に狭しと並んでいく。空になれば皿をどけ追加注文を。話が途切れればビールを相手のコップについでいく。

盛り上がりは最高潮を迎えていた。

かおりは、隅っこで飲めないビールを少しずつ減らしていく。手で持っていないとつがれてしまうと知りながら。

「かおりイ、あんたも大変だねえ」

同僚の牧野がほろ酔い感じでかおりの顔をじいとする。手に持つコップの中のビールの減りは早い。「何がさ」

「新田くんだよ。あんた、結構一緒に居たじゃない。目えかけてもらっててさ。あたし、うらやますいー」

目が虚ろだ。

「うん……犯人、捕まらないかな、早く。私、怖い」

「ねえー。あ、これおいしい」

かおりの目の前のササミチーズカツをつまみ、かおりにも勧めた。「昨日はどっかの廃ビルで変死体が見つかったみたいだよ。噂で聞いたけど磔はりつけにされてたんだって。意味あんのお、ソレくわけわかんない」

「そうだ……ね」

磔はりつけだろうが逆さづりだろうが、かおりにはそんな事はどうでもよかった。『黒いピエロ』。その名をできるものなら変えてほしいとかおりは願っている。

まさか……今までの凶行は、全部。

ジョーカーの気持ちの悪い笑顔が蘇ってくる。彼は、クリスの片割れ。もつと頻繁に襲いかかってくるのかと思っていたら、それは無い。だから余計に不気味だともとれる。

次に会うのはいつなのか……それはクリス サイレントの方にも、だ。

クリスと楽しく夜を過ごしてから少し経つ。かおりは息詰まって苦しくなると、『沈黙』で検索され飛び込んできたあのエレポップ風の曲を歌い踊る、動画の男を観るのだ。

彼はクリスでは無い。また、曲も実は『沈黙』では無かった。

曲の名は和訳して『変化』。自己を変えようという前向きで明るい歌だった。なので、このボーカルの男は笑う『演技』をしているのだなと、かおりは納得していった。

『沈黙』というワードは英歌詞を和訳した所から検索に引っかかったのだらう。検索は、不思議だ。本人の意図しないものまで引っ張り出す……。

かおりの頭の中から引つ張り出された、『ピエロ』。

ボーカルの彼の背景が暗闇で無かったなら、表に出る事も無かった。

もっと言うなら、この曲が無かったなら。

さらに言えば、オルゴールを気にせず捨ててしまっていたなら。

不思議ね。まるで、すべてのものがクリス、あなたへと辿り着くように導かれていたみたいだったわ。

『運命』だったら、もっと素敵ね……。

「かおりイ、何ニヤケてんのおお。その幸せ、分けてえー」

牧野がかおりに抱きついた。酒臭い息がかおりを襲う。「もうっ

っ……」

(幸せ？ 私が?)

恋をしているから?

かおりは赤くなっている自分の顔を叩いた。

クリス、会いたい。

飲み会が終わり、かおり達一行は居酒屋を出る。

まだ酔いの覚めていない者は覚めている者の車や、店の送迎を頼んでその車に乗り、それぞれ帰って行く。中には固まって集団で歩いて帰ろうという声も。かおりはその集団の中に紛れる事にした。2次会へ、という集団もいたが、明日も仕事だからと丁重に断る様子も見られた。

帰路。

繁華街を出て、大きな橋の架かる道路の歩道を2・3人ずつ横並びになって歩く。夜は深い。もう深夜に食いこんでいた時間だった。だいぶ暖かくなってそろそろ春なのかと思わせておきながら、まだ夜は肌寒い。コートを脱ぐのはまだまだ先のような気配がした。

かおりは今日、白いシャツブラウスの上に薄いコートを着ている。マフラーを迷っていたのだが、して来なかった。してきた方がよかったかな、と思いながら真上の空を眺めて首元の寂しさを誤魔化す。空には星が無い。月は、雲に隠れてしまつて。

だからか、今夜は辺りが暗い。

「ねーかおりイ。あんた好きな人いるう？」

隣で一緒に並んで歩いてきた牧野が聞いた。「うん……」

素直に頷くかおりに反応したのは、もう隣に居た河田だ。「ええええええ！ 誰えっ！？ 新田くんじゃ無かつたんだ！？」

突然の喚声に、前列も後列も便乗して大きな声で捲まくし立てた。「かおりに好きな人が！？」「おとなしそーに見えて、誰を狙つてんのさー」「吐け吐け！」「ガーン、何だかちよつとシヨックだなあ。いいな〜って思つてたのに〜」……

一部の男にそんな事を言われて、顔が赤く恥ずかしくなる かおり。言つた事をすぐ後悔した。

「か、会社の人じゃないから……めつたに会えないし」

小さく、場を収めようとする。「そうなの〜？ 遠距離？」牧野

はかおりの顔を窺う。

「うん……」

悲しげな表情を。それを察してか、同僚達は今度は一気に応援モードに入った。

「そうかあー辛いねえ、遠距離は」「でもその方が燃えない？ 会った時」「会う前に浮気されんじゃーん」「頑張れかおり！ 電話してる？ 待ってちゃダメだよきつと！」「……」

電話も何も……とかおりは心の中で呟きながら、励ましてくれている同僚達のおかげで少しずつ元気が出てきた。

次元の壁を越えて彼に会う事は た易く無い。もし鏡に呼びかけても、沈黙の神の監視下にあるクリスは出ては 。 思えば思うほど、心は苦しくなるばかり。きつとクリスも。

「男の立場から意見を言っと。一途では いて欲しい。それがしつこい、ってんなら、最初から思い切って別れ話を持ちかけるけどなあ。待たせんのも悪いじゃん」

かおりをいいなと言った男・前島が振り返りながらかおりに言った。

「……」

かおりは大事な事を思い出した。クリスとの約束。『沈黙の神の目を盗んで……』。

君に知らせるよ、と。そして口づけを。

……待ってていいの？ ……クリス。

「前島、言うねー。ちょっと見直したけど」「河田が あはは、と笑う。」

「俺はね、ちょっとショック受けてんの。ホントに綾野さん狙ってたし」

そんな前島の脇腹を横から小突く隣の島坂。

「ま、2人とも元気だせやー。なるようになるさかい」

関西出身の島坂はぎゃっはっはっはと高らかに笑った。

かおりは、同僚達の言葉一つ一つに感謝して胸の内がいっぱいになった。いつの間にか顔にほころびが生まれる。期待感がかおりを元気にしていった。

「それじゃ、私こっちだから……」

家まで数十メートルといった地点で。かおりは4・5人の帰路の集団から別れを告げた。

「家まで行くよ、もう少しでしょ」「いい。大丈夫だよ、ホントすぐだから」

かおりは手を振って皆から離れた。

「バイバイ、また明日ね！ おやすみ」

「おやすみ、かおり」

「おやすみ」……

かおりは明るかった。同僚達に元気をもらい、夜道なんて怖くなくなった。かおりは急ぎ足でマンションの並ぶ歩道を歩く。車は一台も通らない。人も歩いていない。だが全然怖さを感じなかった。

公園前にさしかかる。

ここを過ぎればもうすぐに、かおりの住むマンションの入り口が姿を現す。かおりは車両止めのされた公園の前を通りすぎようとしていた。

公園内には遊具や砂場などは無い。何年も前から危険なので、始めはあった滑り台やブランコなどは撤去されてしまっていた。あるのは隅の方に並んである、ベンチと鉄棒のみ。あとはただっ広い土と砂の地面一面だった。

こんな深夜に誰も居るはずが無い。かおりはそう思い込んで公園内を通りすがら見た。すると。

入り口から奥へ、突き当たる所に。
何か変な物が。……置かれている？

暗くてはつきりとは分からなかった。かおりは好奇心にかられる。

「……」
しばらく入り口で立ち止まって考えていたが、こんな所でジッと
しているよりは、と。

かおりの足は公園内へと進んで行った。ちょっとぐらいなら、見
てくるくらいなら……と。ほんの、軽い気持ちだった。

しかし踏み入れ近づくと、かおりはやがて『それ』が何である
かを理解し……驚愕した。

「……！」
吐きそうになる衝動がかおりを襲う。目を背けた。

死体だ。

……小さい体。恐らく子供の。「……！！」
仰向けに、頭は横を、下半身は逆に捻^{ねじ}らせていた格好を。そして
胸に集中し数え切れないほどの細く長い傷が、クロスを描くように
斬り刻まれている。暗くて赤には見えないが、死体の傷を中心に辺
りに飛び散って……。

かおりは声にならない声を上げた。ゆっくりと見、ガタガタと肩
を震わせた後。落ち着いてと自分に言い聞かせた。

やがて警察に、と。縮こまっている体をクルリと、入り口へ向け
た。

しかし かおりの行動は妨げられる。

全く気配には気がつかなかった、かおり。背後に忍び寄った者の
存在になど。

かおりは何かにブチ当たる。それは自分より背の高い人間だった。
ドスンと、後ろに倒れるかおり。……

「見たんだね」

高揚を含む声。遊ぼうよとでも言いたげな声色だった。かおりは、この声を知らない。「……………」

相手を見上げた。知らない、ウェーブがかった髪の毛の長い、日本人の男。かおりを見下ろしている……………片腕だけがビッチョリと衣服ごと、何かで濡れていた。

血だ。

かおりはその腕の先をゆっくりと目で追った。手に握られている物がある、それは。

凝った造形をした……………アーミーナイフ。

腕の一部のように、血に濡れている。「いやあああ！」

かおりは初めてこの時にやっと、声に出して叫ぶ事ができた。

「うるさいね……………」

男は ふふ、と笑ってかおりの腕を引っ張りあげた。綺麗な方の手で。そして強引に男はかおりを連れて、死体から少し離れた。隅の方へ。かおりはガシヤンと、フェンスに身を打ちつけられた。

背中に ぶつけられた程度の痛みが走る。

一瞬クラツとした視界を我慢し、正面を見直した。前には もちろん男が……………立っている。

「女性と子供は出歩いてはいけないよ、こんな夜中に。でないとした易く……………こうしてボクに遊ばれてしまう」

まだ10代くらいの男だった。かおりには全てが分かった。

こいつが……………こいつが、『黒いピエロ』！

ウェーブ髪男の体が首を掴んだ手で持ち上がる。凄く強い力だとかおりは息を呑み目を離せないでいた。軽々と腕一本で持ち上げられた男の体……バタバタと、足を空でバタつかせる。

もかく男。暗がりですら首に浮き出た血管が見える。目玉が飛び出そうなほど見開いていた。

かおりは恐怖で息さえつけない。

……

やがて男は静かになった。……

ダランと力無く、重力のなすがままの状態へと変化したウェーブ髪の男。ボトリと先に地面に、握り締められていたナイフが落ちた。後を追うように、男の体も掴んでいた手から解放され地面に沈んだ。フェンスにすぎる格好のかおりは、まだ力チカチと鳴る奥歯で「ひっ……」と小さく叫んだ。ドサリと地面の上へ放られた男の体は、這い蹲る滑稽な骸へと化けた。

沈黙する。

かおりを助けた男は、馬鹿を見下す目つきと笑いを表していた。フン、と鼻までも鳴らして。彼は……。

「ジョー……カー……」

かおりは やつとまともに声を発する。彼の名を呼んだ。

「久しぶりだな、かおり。会いたかったよ」

目はかおりへと。笑いは変わらない。

「私を助けてくれたなんて……意外だった。『黒いピエロ』があなたじゃなかった事も……」

「人を殺したのは初めてだ。俺は」

ネクタイを少し緩めながら、俯き加減で彼は言った。

「どういう事？」

かおりはジョーカーの言葉を聞き逃さなかった。殺人は今回が初めて？

「俺は初めてだ。もう一人の『サイレント』の方は、昔に子供を殺した」

第7話【子供】

あなたは何かを勘違いしているんじゃないだろうか。

あなたじゃない方のクリスが昔、子供を殺した？ …… 馬鹿な事を。

かおりはジョーカー……彼の言う事を信じなかった。

「まだ思い出せてないんだな。早く思い出してやれよ、奴が哀れすぎる」

ジョーカーは両手をコートのポケットに突っ込んで、地面の小石を蹴った。目は地面ばかりを見ている。いつものような皮肉な笑い方をしてはいなかった。何処か、寂しげな笑いを。

「思い出せて、何を……？」

フェンスに背中を合わせ手で よじのぼりながら足を立たせた。

言いながら、必死で過去へ記憶を探る。奴ってサイレントの事よね、と思考を張り巡らしながらの過去への迷走。

なかなかそれは、姿を現さない。

かおりの視線の先は、ジョーカーの向こうへと移っていった。向こうでは子供の死体が転がったままで、先ほどついた印象と何も変わりは無かった。

子供。

子供の、死体。

突如、記憶の奥底からキーワード『子供』『死体』とともに。かおりからある思い出が引つ張り出されてきた。 ……

あれはいつの事だったのだろうか。かおりは、はっきりと何歳頃だったのか、覚えていない。小学生の中学年くらいだったと思う。

実家の近所の、マンションが建ち並ぶ所。かおりを含む数人の子供達は学校から帰った後、よく遊び場に使っていたマンションがあった。一緒に居た子供のうちの一人がそこに住んでいたからだった。

その日も何処かで待ち合わせて、マンションの敷地内で遊ぶ。『かくれんぼ』をしようか、と誰かが言い出し皆賛成した。

ジャンケンでオニを決め、かおり達はそれぞれ隠れ場所を求めて散る。かおりと、仲の一番良かった友達で名前をアイコといった子供と。2人はマンションの階段を一緒に上がって行った。

ある程度上の階まで上った後、2人は階段の下段に仲良く並んで座り、おしゃべりを始めた。他愛も無い話。昨日観たテレビや、2人が好きなアイドル少年の事などの……。

すると話題は変わり、それぞれが学校で好きな男子について、話し始めた。

かおりから正直に言う。かおりには同じクラスに好きな男の子が居た。

一番の親友であったアイコに、恥ずかしさを通り越して打ち明ける事に決めたのだ。おとなしい かおりの、精一杯の親友への告白だった。誰にも言った事は無かった。

すると、実は私もその男の子の事が……と、アイコも胸の内をさらした。打ち明けた。

かおりは、ショックだった。一番好きな友達が、一番好きな男の子を好きだったなんて。

三角関係だ。子供ながら。

かおりの心は複雑に揺れる。どっちも選べない……けれど。

活発で勝気なアイコには、勝てない気がしていた。かおりには。

アイコに悪気は無い。むしろアイコは、かおりを気づかった。「

私達 友達だけど、ライバルだね。負けないよ！」

そんな笑顔を振りまく。かおりもニコツと笑ったが、ますます自信は無くなった。

……やがて……。

かくれんぼのオニが、近づいてきた気がした。

下の階から、足音と会話が聞こえる。オニの子の声がした。先に捕まった子と、階段を上がって来ようとしているのだ。

かおり達は来た！ とお互い顔を見合わせ、上へと逃げる事にした。まずはアイコが、後ろから かおりが。

階段を駆け上がる。

息も切れる。

かおりの方が遅かった。先に行くアイコ。かおりを置いて。

かおりがハアハアと苦しそうにしながら、階段の途中で足が止まると。突然、かおりの頭上から悲鳴が聞こえた。「きゃあ！」と……。

え、とかおりが顔を上げ階段の一番段上を見た瞬間だった。

ドサツ。……ゴロゴロゴロ……ピタリ。

かおりの横に『降って』きて、その勢い止まらず階段下まで転がり落ちていった。

人間が。

それは、アイコだった。

「……！」

かおりは即座に悲鳴を上げる。とてもよく辺りに響いた。

かおりの目下では、変わり果てたアイコの姿が目映っていた。

ぐにやりと、寝相の悪い人形のように異質な格好で。

かおりは悲鳴を上げた後に場に屈み込み、アイコから目を離そうと前を向く。

そうして何者かの気配に気がついた。

タタタ……

小さな小さな、足音。アイコが落ちてきた、階段を上りきった所から。

かおりは見た。

サツと……何者かの影が走り去るのを。

恐らくあれは……

……子供。

「クリスが……友達を階段から突き飛ばした……の？」

かおりはぼうつと、前を見ていた。前にはジョーカーがかおりを上目づかいに見ている。しかしかおりはジョーカーを見てはいなかった。何処か……違う一点を見ている。

信じられなかった。かおりには。

やっと……やっと思い出せた記憶。クリスがかおりを助けたという、過去の一部。

それが。

そんな残酷な事実だったとは、かおりにはとても信じる事ができなかった。

「嘘、嘘よ。あの優しいクリスが、サイレントが。そんな事、するはずが無い！」

首を振ってまで否定しようとするかおりに、ジョーカーはニヤツといつも通りに笑いかける。本調子を取り戻したのか、さも楽し

げに。

「信じる信じないは好きにすればいい。だが事実だ。俺というジョーカーが生まれクリスマスから分かれたのはもつとずつと後の事。子供を突き飛ばしたのは俺じゃ無い。それはハッキリさせておこうか」

「……」

本当に？

……かおりの頭の中は混乱する。口元で組んだ両手はブルブルと震えていた。視線は、行き先を見失って落ち着かない。何処を見ていいのか分からなくなっていた。

「どうして……」

涙声になった かおりに、容赦無く浴びせるジョーカーの嘲笑の
声。

「ふっ……君の恋を応援したかったただけだろうよ。かおりがあんまり可愛い顔して悲しむから、つい手が出ちまったんだらうぜ。なあ奥手のかおり」

「……」

あんまりだとかおりは怒った。……でもすぐにそれは引っ込む。どう感情を表した所で過去が変えられるわけでは無く、ジョーカーにからかわれるだけだと諦めた。

「まだ俺ら……クリスマスは、子供だった」

何処か、ジョーカーは遠くを見るように言う。

「子供だったからといって罪が許されるわけでも、罰がなくなるわけでも無い。3年は3年だ……逆を言えば、人を一人殺しておいて3年で済むという事だ。俺らの世界じゃあな」

沈黙世界。

一体、どんな世界。

「沈黙世界は、辛い……？」

かおりは聞いた。今まで考えた事など無かった。ジョーカーはフン、と鼻を鳴らす。

「もう慣れた。おたく達の神経じゃ耐えかねるだろうよ」

「……」

「怖い？ かおり」

面白そうに かおりの顔を覗き込む。かおりは嫌そうに顔を逃がす。あんななんか嫌いよ、見たくもないわと。クリスが知られたくない過去を思い出してしまったのも こいつのせいだと、かおりはジョーカーを憎らしく思った。

「クリスは……？」

かおりはジョーカーを見もせず聞いた。

「サイレント……クリスは何処？ 居ないの……？」

全身の震えが止まらない。かおりはクリスを信じていた。例え殺人という罪を犯してしまっただとしても。

「クリス……会いたい……会わせて……」

涙が一滴、……地面へ落ちる。

それが機に、かおりの体はジョーカーの力強い手で引き寄せられ、スッポリとその大きな体の中に埋められてしまった。「……！」

びっくりしてジョーカーの体温を感じるかおり。同時に、「力」も感じた。突然で戸惑い、全身がカツと熱くなる。

かおりのすぐ頭上でジョーカーは……相変わらず皮肉めいた声を。「出会った時に言っただろう？ ……君は、」

僕のものだと」

（“僕”……？）

かおりは奇妙な感覚に襲われた気分だった。“俺”では無い、“僕”だと……。

それではクリスは？

力強く抱きしめられ逃げられない かおりは叫んだ。

「あなた、どつちの『クリス』なの！？ 離して！」懸命に訴えた。
あなたも子供なんだわ かおりはジタバタと、ジョーカーの腕
の中であがく。必死の抵抗を試みた。

するとその時。

「うわあああ！ 人が死んでる！」

ジョーカーの背中の方こうで、別の悲鳴が上がった。その声がし
た方向は、子供の死体があった場所。どうやら死体を見つけた通行
人らしい。

しまった！

逃げなくちゃ。捕まってしまう。または怪しまれて。

このままでは。

「……仕方無い」

ジョーカーは、かおりの身をいったん引き離すと……。」「……？」
空気に混じるように消えた。

かおりとともに。

第8話【沈黙世界】

何も無い暗闇の世界。光が無い。だから反射も無い、像も映るはずが無い。

なのにジョーカーの姿と白い顔は、浮かび上がっている。

声が出ない。発せられない。音という概念が無い。無音。無声。もしやここが『沈黙世界』？

“私”は、こちら側に来てしまったの……？

かおりは、ジョーカーに押し倒されていた。(……！)

無表情だった彼の顔が、ニヤリと笑う。仰向けの かおりの上に馬乗りで片手はかおりの耳元につき、もう片手では小さなナイフをゆっくりと何処から取り出し示す。

光りはしていないが、その存在は大きい。かおりはナイフを見てゴクリと喉を鳴らした。

かおりだけを見ている。かおりの目だけを。

光の無い目で。

私はどうなるの？ どうされるの？

歯を食いしばる、かおり……。かおりもジョーカーの魔力がかつた瞳には逆らえず、力に捻じ伏せられている。逆らう事など、茶番なように……。

もう一度 言う。

声が出ない。

(クリス……)

神経や脳が麻痺しているのかもしれない。「沈黙」を恐れるかおりは、あまりの恐怖に思考まで侵されてしまった。もはや抗う発想すら思い起こせない。体が動く事を忘れた。死んでいるのか生きているのか、自分の存在すら確かでない。

(ク、リ……ス……)

かおりは愛する男の名を呼ぶ。しかし花がすぼむように小さく消えていく。

(……)

君は、僕のもの。

ジョーカーの口がそう言った。そして地についでいた方の手で労わるように優しくかおりのこめかみ辺りの髪の毛に触った。そしてそれに顔を近づけて自分の口唇へ……至近距離となったお互いの顔は、さらに近づく。

口唇から口唇へ。

そっと……

長く………。

……

甘い夢というものの揺りかごに揺られている幻想を見た。

目を閉じた2人に訪れた『沈黙』の、一つの時という空間を。世界を。

音を発する事無く、終わりが終わり、始まりが始まるうとしてい
る。

かおりの思考が返ってくる。

(あなたは、サイレント……?)

目を細く開けたかおり。ずっと口は塞がれたままで。

(優しいあなたは、サイレントじゃ……)

殺すと言ったのは ジョーカー。

優しいのは サイレント。

ニヤリと笑うのは ジョーカー。

微笑んで笑うのは サイレント。

ナイフを持つのは ジョーカー。

人を殺めたのは……。

……。

……あなたはジョーカー？ サイレント？

……どちらも、クリス。

……そう……そうだったの、ね……。

そう……。

ジョーカー。

私が、あなたを認めなかっただけなのね。

かおりの腕が、クリスを抱く。ピク、とクリスは反応した。
かおりの手は、クリスの髪を、頭を、かき撫でる。

目を開けたクリスは、かおりを見て信じられないという顔をした。
かおりが、笑っている。……

目は、閉じたままで。……

かおりの口唇を読む。

いいの 好きにしてクリス

私は あなたのもの

と。

クリスの全血管に熱い血液が走る。衝撃が彼の中へと侵入する。
そしてそれは、クリスの心をひどく苦しめ窮地へと追い込んだ。

……

僕が君を守る 俺が君を襲う

誰が君を さらう？

僕が君を守る

どうなっても……知らない。

目を閉じていた。何の音も聞こえるはずが無い。

音は、聞こえない。

聞こえない。

しかし、かおりの上から何かがボトボトと落ちてきた。感触は、伝わる。

(……………?)

かおりが目を開ける。
驚愕した。

(……………!!)

クリスは馬乗りになったまま、上半身は起こし、片手で持っていたナイフで自らの胸を一突きで刺していた。

刺して、まだ奥へと、ナイフ全てをえぐり込むように、押して、押して。

クリスの、苦痛に歪む顔。

音も無く。

(あああ……………!)

かおりは無声の声を上げる。かおりの手にはクリスから流れた血が。

鮮明に。

クリス……………ツ……………!!

第9話【ピエロ消失】

かおりの叫びと感情がこの『沈黙』世界に流れ込む。

かおりは叫んだ。音が存在しないと分かりつつも構わずひたすら感情を叫んだ。

私の横へと倒れていくクリスの体。スローモーションのように助からない。

こんなに奥深くナイフを突き刺してしまっでは。

クリス、目を開けて。

クリスは目を開けない。

だが、微かに口元が ほころんでいた。

道化なの いい加減にして！

私がどれだけ泣き叫んでも。こんなにあなたは近くに居るのに。

私の声は届かないのね。これが『沈黙』の世界なのね。

辛かったでしょう。苦しかったのでしょうか。

罪を犯してまで。

殴るように かおりの言葉は並べられた。

誰にも、伝わらないまま。

……

かおりが目を覚ますと、自分の家の部屋に居た。

マンションの一室。暗く、電気は点いていない。かおりは部屋の

鏡の前で、膝を抱えるように倒れていた。ムクリと起き上がって状況を把握しようと努める。

さっきのは夢？ クリスへの想いが見せた幻想？ とかおりは考える。なぜなら倒れていたはずのクリスの姿など何処にも無いからだった。

確かめる術は無いと思われたが、あった。

鏡に、クリスが映っている。鏡の前には居ない者の姿が。

やがて鏡に映っている者は、中からそれが普通のように かおりの元へとやって来た。

全く無傷のクリス。服はいつものと変わらぬ、紐靴、ピーコート、ニット帽。指先をカットした手袋をポケットに突っ込んで。颯爽と登場した。

「クリス……！」

かおりは、喜びの表情を浮かべ立ち上がり、両腕でクリスの両腕をそれぞれとった。存在を、温度を確認するかの如くクリスの頬や手の平に触る。クリスは笑っていなかった。

「死んだんじゃないかったのね！ …… 生きているのね。ああ良かった。ああ……」

両手でクリスの片手を握りしめた。かおりの膝は今にも安堵で崩れてしまいそうだった。

しかしクリスは笑わない。その事に気がつく前に。

クリスの口から残酷な言葉が吐かれた。

「死んだのは、君を愛していた方のクリス」

「え……」

かおりは笑顔のまま、クリスを見つめた。
無邪気に笑うかおりの耳には容易には届かない、酷な言葉を。

「僕”は、『沈黙』の世界の住人、クリス。……やっと一人になれた」

ここでやっと かおりの笑みは失くなる。そしてかおりは受けた言葉を一つずつ、解読し始めた。

そして理解する……いや、していない。

「何それ……」

意味が分からない、かおり。

「もう君を愛した“僕”も“俺”も存在しない。身が軽くなって清々（せいせい）する」
笑う。

ジョーカーのようなニヤニヤ笑いとは違うが、サイレントのような微笑みとも違う。全く別の、そう……。

清々（すがすが）しい、笑い。さっぱりした表情の。

これはかおりが知っている2人の、どちらのクリスでも無い。全く異なる、新しいクリス。

クリス・マークス。

「そんな……嘘よ！」

かおりはクリスの体を揺さぶった。かおりを見下ろすクリスの笑顔は。

かおりは悟る。自分の知らないクリスがここに残ったのだと。

脳裏によぎるは道化師。サーカスのピエロ。

白塗りの顔で鼻を赤く丸く描き、口は大きく見せる為に こちらも赤く化粧する。服は青や白といった縞の模様の服で、被っている黒いハットなんかを手に取りながら、中からハトを飛ばしながらと

足で華麗にステップを踏む。

ステッキを振り、空中で回して魔法をかけるかのように狙いを定めて。そして見事に失敗する。

ああやっちまったねとまた踊る。観客に笑われて。また笑われて。でもそれは普通のピエロ。陽気な皆のピエロ。

だが『黒の』道化は笑いながら人を騙し、手にはナイフを持つのだ。

「さよなら かおり。邪魔者を消してくれて感謝する」

私は。

私は、『彼』の全てを受け入れただけ。それだけ、それだけよ。なのに何故消えるの。おかしいわ……。

かおりの、クリスの腕を掴む手が緩む。クリスは まだ笑い続けている。楽しげに。……楽しげに。

これは何の為の笑顔なのか。かおりは一生懸命考える。考えて……。

道化は 人を 騙すのだ。

「待って」

かおりはクリスを真剣に見つめた。掴んだ手は絶対に離さない。

「何。もう君に用は無いけど」

乾いた笑いへといつの間にか変わっていたクリスだったが、かおりにはどうでもよかった。どこるか、余計に掴んでいる手に力が入る、かおり。

かおりは真正面からクリスに。
ニヤツと……ジョーカーの真似をしてみせ笑った。

クリスの笑いが少し動揺を見せ引っ込む。真剣にかおりを見返した。

かおりは言った。

「途中で『ジョーカー』なのか『サイレント』なのか、分からなくなってしまうたわ。2人とも、笑いながら私を騙るのが上手なのね」
かおりがそう言った時。

クリスは黙って、そして……。

……諦めたように目を伏せた。少し口元の端を吊り上げ微笑んで降参だと、両腕を上げ手の平を広げて態度で表明した。

「参ったな。せつかくお別れしようと思ったのに。僕が『沈黙』世界に閉じ込められている間は」

そんな事を言った。

かおりは本当の笑顔を作る。大きな目でクリスを。

「もう騙されないわ。あなたは本当のクリス。私が好きな『ジョーカー』と『サイレント』が居る……たった一人の、あなた」

つまりは、偽り。クリスの決死の嘘。

だが かおりを騙せなかった。

「強くなったね かおり。男にフラれた時は、あんなに泣いてたつていうのにさ」

クリスがクス、と笑いながら妙な事を。かおりの片方の眉が上がる。「何の事？」

「大泣きしてただる あの晩だけは」
言われて、かおりは過去を遡る。

キョトンとしたまま動かないかおりを、面白そうに見ているクリス。かおりには意味が分からなかった……最初は。

くつくつくと腹を抱えて笑い、口元付近で遊ばせていた片方の手で、クリスはかおりの目元を触る。

目尻を拭った。その動作が。

かおりの不思議な記憶を思い起こす。……

一年ほど前だ。かおりは付き合っていた彼にフラれた。

突然の別れに、かおりは泣く日を過ごす。しばらくそれは続いた。鳴らないオルゴールだけを残し、彼にまつわる全ての物は処分する。見たくも無いからだ、辛すぎて。

そんな夜が毎日続いてしまう……もう限界だ、ご飯もろくに喉を通らなくてと。

一番、涙が激しく止まらず眠りと現実の狭間を行き交いしていた夜の事だ。

誰かが、かおりの涙を拭いた。

かおりは知らない。ただ。

起きた朝は……いつもと違うような気がしていた。

思えば、目尻に拭かれた涙の跡。

気のせいで済ましてしまった かおり。記憶の引き出しの、奥の奥の……そのまた奥まで。

出てくる事は、無かっただろう。

「何て……」

馬鹿なの、と言いたかったが止めた かおり。情けない、といった顔になった。八の字になった眉を見てクリスも同じ眉になって笑ってしまう。

こんな事で3年も。……2人は笑うしか無かった。

「かおりの察する通り、僕は『サイレント』でもあるし、『ジョーカ
ー』でもある。僕は元々一人。僕という者は やはり一人なんだ。
僕の中の一部分である僕は残念ながら死んでしまったけれど……そ
れでも僕は残る。かおりを愛しているし、かおりを殺したいとまで
思っている。殺さないけど」

「次、いつ会える？」

かおりは今度は首を傾げてクリスに笑いかけた。クリスは そん
なかおりを見てまた抱きしめたいと衝動に駆られてしまう。

でもすぐにグツと我慢した。もう子供では無い。

クリスは沈黙の神に聞かれないうようにと、口の形だけでこう告げ
た。

『また知らせる』

そしてかおりのオデコにキスを。それが約束の証。
クリスは鏡の中へ。

窓からは朝の光が差し込んでいる。段々と朝が夜を追い出し
さあ出番だと自らを曝さらけ出して。
新しい日常がやって来る。

ピエロは、沈黙へと消かえって失した。

《END》

第9話【ピエロ消失】（後書き）

【あとがき】

ついに終わってしまいました。思い入れが強い為ちよつと淋しいですが、何処かで区切りをつけなければという事で。

こんな作者が何かに走った小説に最後までお付き合いを頂き、ありがとうございました。残虐殺人が好きというわけではないので誤解されぬよう（皆ハッピーが好きはずだ）。

話を作るキツカケはある運命的な動画に出会った事に始まります。元歌は80年代、英洋楽の Talk Talk というバンドの歌【Such A Shame】。サイコロ哲学の人生自己改革歌なんです、You Tubeで作者、虜になり1日100回くらいPCの負担を無視してエンドレスで聴いて観ていました。バンド自体はクオリティーの高い凄いバンドなのに日本じゃ知名度が低くて。すごいガツクリです。あんなジャンル融合・哲学・超越した稀有な価値バンド、広めてやりたい（涙）。男なのに天使みたいな透明感のある歌声に癒されています。ああ不思議世界。

さておき。次の第10話は詩、その次のは本編とは関係ないですが本編の前に立てた設定の別話短編。さらにその次のは本編の後日ストーリーとなっています。書きまくったね。

一応、本作は10話完結扱いとさせて下さい。後のはおまけです。

そして実は「道化師消失」は、【ピエロしょうじつ】と読んで下さいね。ここだけの話（ややこしい）。

長々と駄文でしたが。ありがとうございました。

第10話【沈黙の揺りかご】 - 沈黙の神の詩 - (前書き)

お母さんの詩^{うた}です。

嘆き、とも(?)。

第10話【沈黙の揺りかご】 - 沈黙の神の詩 -

さあ お行き 私の可愛い子供たち

15年という沈黙の時を経て

行きなさい 光のある所へと 私は何も望まない

クリス クリス・マークスよ

お前は かおりという少女に恋をしたのか

馬鹿な子 外を見るからだ

中だけを見ていれば よかったものを

さあどうするクリス お前に辛抱が できるのか

お前は まだ子供だ できるのか するのか どうなんだ

ほら見てご覧 かおりが悲しそうな顔をしているよ

どうやら顔は笑っているらしいが心の中はズタズタだ

大好きな親友は大嫌いな友達へと変わってしまったようだね

瞬のうちに

どうする？ クリス、お前は どうする？ 飛び出すか？

…… 飛び出すんだな 愚かな子よ

そして お前は罪1つ 罰3年

なのに お前の顔は晴れ晴れと

小憎らしい子だ クリス 我が子供

性懲りも無く お前は今日も外を見る

やめろと言つのに聞かない子だ

ほら また かおりが困っている 迷っているよ どうするね

やはり行くのだな お前は恐れを知らず

知らないぞ どうなっても

罪1つ 罰3年

お前の仲間たちは皆 お前など置いて去ってゆく

15になったと喜びながら

なのに お前は出られない まだここで時を過ごすのだ

かおりは大人になった

お前も体は大人になった しかしまだ私の子供

時だけが流れていく

沈黙だけが お前の相手だ

寂しいか だから言ったのに 知らないぞ、と

かおりが泣いている 傷ついて泣いている

お前は迷っている 飛び出そうか迷って歩みを止めている

行くなクリスマス・マークス 行けば私は またお前に

お仕置きを しなければならぬ

行くな 行くな 行くなと 私は叫ぶ

悔しいものだ ここは沈黙世界

私の声など 届きはしない

おかえりクリスマス さあ罰だ

まだ子供のお前に残酷の鞭むちを

罪1つ 罰3年

お前を救う術すべは無いのか

無いのだ

時を待つしか　それが掟

沈黙の掟

クリスよ　例えお前が2つに分かれたとしても

やがては返ってくる　そして1つに

その時お前は大人になるだろう

私の元から離れるだろう

さあ行きなさい　罰を乗り越えた2人なら

現実という障壁も　恐らくは

乗り越える事ができるだろう……

《END》

(別話短編) 【それでも道化師は笑う】

暗闇の中で ひとり。

『ピエロ』『道化師』と名をもらった彼は、今日もお客を喜ばせる為に働く。

笑わなければいけない。笑い続けなければいけない。それが彼に課せられた『任務』。

一体誰から？ 母なる天から。

気がつけば そこに居た。存在していた。気がつく前は、どんな姿形をしていたのか……どれだけ月日を重ねて年老いていこうとも、彼には分からなかった。

ふと、心を。関心を向けると、彼は『居た』のだ。この……

静寂とも沈黙とも言える無言の空間に。

ただ自分は。

白のカッターシャツの上に青のデニム地の前開きシャツ、首には手編み風のオレンジ色のマフラーを暖かそうに巻き、濃茶の だぶついたズボンの裾を長めの革製紐ブーツの中へ入れて。指先をカットした黒の綿の手袋を。それから全身を包み込むように緑を含んだ色のロングコートを……着せられていただけだった。

頭にはコートとよく似た色のニット帽を被っている。その中には彼の赤錆色の髪が きちんと整い しまわれている。

服は そうで……顔が。

厚めの化粧を施ほどこされている。ピエロの顔だ。白く塗られた顔全面の下地の上に、落書きみたいな顔を描かれて。

弓の形のような眉に、目尻に沿って描く黒い短めのライン。目の上からは縦のラインも描かれている。

赤く丸い鼻。赤く こめかみにまで届くほど開いたように見せかけた大口。

そして、わざとらしい涙の形を片目元から垂れ下がるように、描かれている。

何にしても『されて』いるにすぎない。

何故なら彼は人形……いや、『道化師』だから。

“お前は ここで お客の相手をしてあげればいいのだ”

天から声がする。彼の母。

「お客の相手を？」

彼の男らしい純白な声が、何処の範囲までが空間なのが定かでは無い辺り中に響く。

“ そうだ ”

「何故？」

“それが お前の生まれてきた意味”

「 そうなのか 」

“ そうだ ”

「僕は ここで、誰かが来るのをずっと待つ……」

彼は天に言い包められて^{くる}いる事に気がついていない。できようか。彼は笑顔で頷く。自己納得したらしい。おかしい事だけであるのに疑問にも思わずに。

段差があつた。コツリと、暗い中で床に硬さを感じた。彼は座る。膝を抱え込むように、姿勢をとつた。頭を中へ埋めて、「ずっと待つ……」と声を下へと吐き出す。「ずっと……」繰り返し繰り返し呟いた。

まるで呪文のように。

そしてそれを自分へ向けているかのように。ニコニコとずっと笑っている。

……静かだ。

……

……コツ……コツ……

ヒールの靴音が近づいてくる。彼の方に。

彼は音のする正面をジツと見ていた。明らかに自分に近づいてくる音と共に、彼の心臓の音も段々と大きく鳴っていく。

一体誰だ。

“お客だ”

彼の頭上に響く母の声。「お客……」

彼は立ち上がった。

自分はピエロ。お客の前では笑わなければ。それが仕事で、僕の使命なんだと。

“さあ行け”

後ろから背中を押された感覚がした。彼は段差を蹴り、前へと歩を少し進める。顔は もちろん、笑ったままだ。

やがて遠く暗闇から彼の視界の届く範囲へと、誰かが やって来る。

甲高い靴音をさせながら。そしてそれは その人は。

無論、女性。彼より少し低いと言えど背が高く、背筋が きちんと伸びて自らの存在を真しやかに見せている。

薄い水色のキャミワンピースは体のラインにぴったりと合っている。彼女のあまり無い肉と細そうな骨は充分過ぎるほど見る者を惹きつけ、美というものを考えさせられてしまっただろう。

立ち姿は、真に美しい。

彼女は彼の前で立ち止まった。「こんにちは」

澄む声。彼は一瞬だけ言葉というものを忘れ置き去る。「……」

心の臓は高鳴り、ドクドクと体中に駆ける血液が熱くなるのを感じた。

「あなたは……だあれ？ ピエロさん？ ……私は、かおり。家で寝ていただけなのに、こんな所に来ちゃった。きつと夢、これは夢なのね？ ピエロさん」

あどけなく笑いかけ、首をクリツと傾げた、かおりという女性。

姿、見ためは大人の女性でも、心は子供のような振る舞いだ。彼の鼓動がますます加速する。「……」

かおりは気にする風も無く、キョロキョロと好奇いっぱい目線を走らせる。

「ね、何か やってみせて」

パンと、胸前で手を一叩きした。

大きな黒い瞳で、彼を見る。

「歌うよ」

彼は言った。

「うた？」

「僕が知ってる、前向きな歌」

彼は歌い始めた。

恥ずかしい事だけど 逃げたつていいと思う

所詮 「上つ面の人生」 なんだから

変わったつていいんだ

我慢しすぎて 倒れる前に

労わるように 僕に言っで欲しい
きつと僕には わからない

このまま 一緒に

居続けて いいものかどうかなんて
恥ずかしい事だね

こんな 恥ずかしい はなし

……

ピエロの彼は ただ歌う。どうせ化粧をされているんだ、たとえ
泣いてたつて笑っていると思ってくれと、彼は そのつもりで
歌だけを…… 精一杯に気持ちを込めて歌った。

明るい歌声。伴奏も何も無く、声のみの。

彼は かおりに。かおりの為に、歌った。……

かおりは……。

彼の歌が終わると、また可愛らしく首を傾げて問いた。

「逃げる事が前向きなの？」

彼の目が かおりを捉える。「そうだよ。頑張り過ぎると疲れて
しまうから」

「ふうん……」

「時々、自分を労わつてあげようと言っているんだ。それは……き
つとサボっていると思われてしまうかもしれないけど」

「休んでいるんだね。お仕事」

「とは、限らないかもしれないけどね」

「ふうん……じゃあ あなたも」

「え？」

「無理してない？ 私には そう見えた」

「……」

突然、かおりは鋭く彼を言葉で突く。彼は驚き……沈黙を。

「ピエロなのに。変ね……あなたはピエロじゃ無い。きつと違う。ここは、あなたが居る所じゃない」

変な事を言いだす かおり。

「何で そんな事が わかる。僕はピエロ……そう言われた。君を喜ばせるのが仕事。僕の事は いいんだよ、かおり。僕は君が笑ってくれれば それで」

「あなたは泣く事を許されていないのね。だからだわ、こんな悲しい歌、私は聞いた事が無い」

どうしてだ。僕の話は君に届いていないのか、かおり。

ゆかいな顔だ。ずっと笑いかけているのに。明るい歌を僕は歌ったはずだ。何故 君は笑わない。何故……

「行こう。私と一緒に、現実の世界へ。こんな暗い所にいないでさ……」

かおりが彼の前で『さあ』と、手を伸ばし誘う。彼は呆然として見るだけにとどまった。

その誘いを拒否したのは彼では無く、『天』の方だった。

“ お前はピエロだ！ 笑え！ 逃げる事など 許さない ”

蔽かな声が響く。かおりにも力で知らしめるが如く。彼は一步、身を退いた。

しかし かおりが強引に彼の手をとる。そして引つ張って自分に近づけた。

「化粧なんかいらぬ。あなたの本当の笑顔が見たい。苦しそうに笑ったふりをしないで。そんなの無駄、無駄、無駄あ！」

かおりが彼の体を包む。彼にとっては初めての事だ。言葉も、行

動も。

彼は己の事が分からなくなる。分かる事は……。

あたたかい……かおり……。

気がつけば、暗闇だった世界。

何も、考える必要の無い空間に僕は居た。どうして僕がここに存在しているかなんて。だって僕はピエロ。僕がここに居る理由は……。

彼はかおりに抱かれるがまま、目を閉じ、口を閉じ……心を閉ざす。

“邪魔な娘だ。消えるがいい”

天は怒り狂い、かおりに頭痛を食らわせた。「きゃあ……！」

苦痛に歪む かおりに、ハツとした彼は今度は かおりを抱きか

かえた。「やめろ！」

叫び、天に吠えた。

「僕は何処へも行かない。ずっとここに居る。だから かおりには何もするな！」

すると天は“分かればいい”と、力を引つ込めた。

かおりはフラフラと、片手で頭を押さえながら立つ。彼の肩に

つかまりながらも。

「ひどいわ……」

泣きながら。

「ありがとう……僕のために、こんな……」

ピエロは泣かない。代わりに……笑いかけた。「嬉しかった」

かおりは帰る。現実へと。名残惜しみながら、彼に手を振って。また来るから、夢を見るからね、と。言い残した。

「さてと……最初だったから、上手く笑えなかったかな……」
かおりが去った後、段差に座り 肘を、折り曲げた脚の膝の上について ため息をついた。

次の お客を待ち続ける。次を……

……

彼は気がついてはいない。

彼が どう頑張って他人に笑いかけた所で。人は決して喜ばない。
所詮 作られた笑いだと知れば、誰も楽しんではくれない。

かおりが教えてくれた。ここはあなたの居るべき所じゃないと。

ピエロは。

笑う事を休めない。

END

（別話短編）【それでも道化師は笑う】（後書き）

【あとがき】

これはこれで独立して短編小説扱いにするか悩みましたが、かおりが出てきてしまったので、この中に放り込みました。彼はクリスマスの前のクリスマスかどうかは分かりませんが、いつそピエールでいいんじゃない。適当。

次話は本編の方の後日談ですね。11よりも12の方が数字が好きという理由から書いた12話目です。何じゃそららら。

読了ありがとうございます。

後日談【残酷のナイフ】（前書き）

本編の後日ストーリーです。
どうぞ……。

後日談【残酷のナイフ】

かおり、元気？ 僕は元気だ。

この『沈黙世界』で僕は、相変わらず君の事を想う。

時々、君が泣いているのを見る度……ここから飛び出してしまいたい
そうになってしまうのも相変わらずだ。結局 僕は踏みとどまって
『ああよかった』って……笑うよ。

かおり、好きだ。愛している。

ここから声は発せられないけれど、いつか……僕が『刑期』を終
えてかおりの元へ行った時。辛抱という時間を過ごした後に。

僕は君を、離さない。

待ってて かおり。すぐ行くから。すぐに。

すぐに……。

……

…… 『掟』 破りは罰3年。クリスマスに科せられた罰は幾重にも重なり、2人にとっては気の遠くなるほどの年月となっていた。

クリスマスが、かおりを愛したばかりに。

皮肉とはこれを言うのであろうかと。

母である『沈黙』の神は我が子クリスマスを残念に思う。

そしてそんなクリスマスに母は、ある玩具を与えて遊戯をさせる事にした。

母の心中、察すれない。

ただクリスマスは手に玩具を、そして言葉を聞いた。母から教えられた一つのルール。

『それでかおりを刺すがいい。さすればお前の刑期を半分にしてやる』

クリスの手には、一本のナイフが。

それはかつて……自らが所有していた事もあったナイフ。かおりの目の前で自らの胸に突き刺した事もあった小さなナイフ。名がある。

『残酷のナイフ』

クリスは地上へ降り立つ。

片手には……ナイフを持ち、向かうは……。

都会の闇。

光を求めた街。

光をくねと、懇願しているようにも見える景色。

いつだったか、クリスの中に『ジョーカー』がまだ居た頃、散々この景色を見渡した。ビルの照明、連なる店のネオン、道なりに続く街灯、車のテールランプの波、そして……。

……どこかで光る、執念を散らす眼光など。都会は24時間、休みを知らず朝を迎える。

光が無ければ死んでいよう。

「かおり……」

クリスの心は穏やかでは無い。

自分の目下に広がる光の宝庫に、クリスは向かって重い息と言葉を吐きかける。高層ビルの屋上の手すりの上に突っ立っている彼の両の手は、彼の落ち着くべきコートポケットの中へと滑り込む。

目線は遠く地平線を見ているつもりでも。
脳裏には想い人しか浮かばない。

(どうしたら……)
片方のポケットから、大事に折りたたまれたナイフを取り出し見る。何故ナイフの刃はこんなに光るのだろうと。そんな事を考えながらも。

それは クリス よく斬れるからだろ それがそいつの 存在だからな

「うるさいぞジョーカー」

クリスは低い声で窺たしなめた。自分の中に居る者の戯言の相手をするなど、今の彼には余裕は無い。

(ククククク……)
笑い声がする。鬱陶うっとうしい自分の声だ。「消えろ！」

無駄だ 俺はいつも お前の隣に居る 背中合わせだ

クリスは かおりの元へと向かう。
ひっそりと佇むマンションの3階、ベランダへと立ち姿で現れる。
『サイレント』の方の彼はここで初めてかおりと会った。本当はクリスはずっとずっと昔から かおりを見ているし知っていたのだが、かおりの方に面識は無かった。

やあ かおり。

クリスはベランダのガラス戸を通り抜け、そんな挨拶を口だけで言った。声は発していない。

かおりは寝ている。朝が来たら かおりは仕事で出勤だ。

ベランダから戸をすり通り、そしてすぐ横でスヤスヤと寝息を立てている かおりを見た。

頭を戸の側へ向けて。仰向けで、ちゃんと全身は布団の中に収めてキチンと。彼女の髪は、枕に沿って優しく流れている。

睫毛は長く規則正しく、口唇は乾いてか艶が無い。頬は冷たく……冷たい、と感じるのは、クリスの片手が かおりの頬に触れているからだった。

(かおり……)

何度 名前をこれまで呼んだだろうか。しかし かおりは気がつかない。

想いばかりが馳せそう。

何度 自分を止めただろうか。

(……)

クリスは、かおりの上に手をつく格好で覆い被さる形をとった。かおりは全く気がついてはいない。気がつかれてはならなかった。

クリスの手にナイフの刃が光る。『残酷の』と付く 必要の無い名の付いた、ナイフの刃。

クリスは彼女をこれから刺そうとするのだ。朝が来る前に かおりの目が覚める前に。

刺せ ひと思いだ

かおりが苦しまないように

そうすれば お前の刑期が軽くなる

クリスは ここに来る前の、沈黙の神との言い合いを思い出す。

刺せば刑期が半分だと？ 軽くなった所で かおりが居なければ意味が無いだろう

クリスは そう叫んだ。無音の世界で叫んだ。

しかし神は言い返す。『かおりが死ぬ事は無い』と。どういふ事だと尚も叫ぶクリスに母は言って捨てる。

『遊戯だからだ』。

母の思惑、理解し難し。

神である母が嘘をつく事は無いだろう。クリスはそう思った。ならば……

「ん……」

クリスはハツとして瞬間のけぞり返る。かおりが寝言を起きてはいないが、それだけでクリスの内心に波が立つ。ナイフを持つ手の力が弱る。それを叱るのは奴の声だった。

やっちまえよ

クリスの視線は かおりから逃げた。

逃げるな

下口唇を噛み苦痛の表情で かおりへと視線を戻す。

かおりの無邪気過ぎる寝顔と吐息が、クリスをますます追い詰め追い込め窮地に立たす。

(だめだ 僕には出来ない)

臆病め！

奴の罵る声はクリスの涙腺を刺激する。しかし涙は流さない。

(僕には出来ない僕には僕には僕には！)

声を出してはならない。かおりに気がつかれてしまう。出してはならない音。

クリスは……

ならば引っ込んでいる 俺が代わりにやってやる

突如として体の主導権を奪われた。すなわち、ナイフを持つ手に力が入る。

かおりに狙いを定め、大きくそれは振りかざされる。狙うは心臓、支配されたクリスの目は 鋭く光り、かおりに容赦無く先に視線を貫いた。

少し口元をニヤつかせて。

やめろ おお おおッ！！

ザシュッ……！！

……

……

血液が飛ぶ。飛沫は範囲狭く、辺りに散った。

かおりは悲鳴を上げる事も無く……微かに開いた口からは血が――筋道に流れ出て、瞬間少し体がのけぞった。

かお り ……

刺し込まれたのは心の臓とは逆の側。定め確かだったはずの狙いは逸^それた。

逸^そらされた……。

「かおり！」

今度は声を発したクリス。血まみれの手から血まみれのナイフがスルリと滑り落ち音も無く床のマットの上へと落ちた。

役目を終えたもう一人の「彼」がクリスから別れ、姿を現す。

「ジョーカー」……再び彼から分離した、もう一人のクリス。彼は、まだベッドの上で跨^{またが}って かおりに呼びかけている「サイレント」の彼に、一瞥を食らわした。

フンと鼻を鳴らし、ベランダから見える外の街並みを睨む。

「帰るぞサイレント。かおりは死なない。心臓狙いをお前に邪魔されたしな」

ガラスには映らない自分の影を疎ましく思いながら、両手を前で広げて見せた。

綺麗な両手をし、彼に笑みはこぼれなかった。

かおりは死んではいけない。神の言った通りに。

これは遊戯だ。ゲームなのだ。

クリスを 救う 為の 。

「ん……」

開け放したままのカーテン。ベランダの戸から差し込む朝日に、かおりは眩しさを感^あじて目を覚ました。「ふわあ〜」

上半身を起こし腕を天井に伸ばして思い切り体の中へと空気を送

り込む。ついでに大あくびを披露した後、ムニヤムニヤと。口の中を潤わせ、まだ半開きだった寝ぼけ眼をゆっくりと開ける。そして……。

「あれ？」

自分が着ていたパジャマの胸元に、割と大きめな穴が開いている事に気がついた。

「……………」

身に覚えの無い穴。穴が開いているだけで、特別変わった所は無い。かおりは首を傾げながらも、「ま、いつか」とベッドから離れた。

奇妙な事が もう一つ。

「あれ……………」

消してあるはずの机の上のパソコンの電源が ついている。

かおりは不思議に思って画面を開く。

しかし何も変わった画面では無く、通常のデスクトップ画面だった。

(おかしいなあ……………消せて無かったんだ……………?)

疑問符が消えないままでも、かおりは深く考えるつもりも無かった。

これから朝の支度だ。まずは紅茶でも飲もう。そう考えてパソコンを消す前に。

ついでだからとメールチェックを試みた。

……………一通、受信する。

「え？ 誰からだろう？」

差出人は不明で、それには短く こう書かれていた。

20xx年 4月1日に 会いに行く

《END》

……ここまでで話は終わりです。後は……おまけ。

お邪魔するよ。俺は『ジョーカー』の方のクリスだ。馬鹿な相方のせいで、また現実に ご登場だ。やってらんねえ、せつかくクリスの中で おとなしくしてるつもりだったのによ。

これも全部『サイレント』のせいだ。情けねえ奴だね、ホント。こいつも自分だと思いと寒気がしてくらあ……。

何でここに来たかってか？ 別に、あんまり意味は ねえかもしんねえけどよ。誤解されると困るんで、一言 言っておく。

俺は『サイレント』が でえつきれえ（大嫌い）だ。それだけ。

かおりの奴も何であんな甘ちゃんなのがいいのかねえ。

俺のが よつぽどよくないか？ なあ？ かおり。

前の俺が消される前、俺は『サイレント』の奴に会いたがって苦しんでいた かおりを見ている。見て思ったね、かおりも片割れの方も滅茶苦茶にしてやりてえってよ。だからこっちの世界に連れて来たってのに。

かおりの奴、俺の肩に手を回しやがった。

面白くねえ。

俺はクリスの影の存在で充分。光なんざ望まない。

そんなもんは奴に渡しとけ。俺は沈黙の中のが居心地がいい。

かおりを殺すのは俺の役目だ。すっこんでろよ甘ちゃんクリス。

4月1日？ さあねえ。

俺もお前も我慢できるか保障は無いね。

とつと消えちまえ何処へでも行ってよ。

俺は沈黙世界で生き続ける。

じゃあな。

沈黙の神の甘ったれ親馬鹿にも感謝しな。

《……END》

後日談【残酷のナイフ】（後書き）

【あとがき】

最後に余計なものまで。

作者、終わりたくないばかりに食い下がってますね。しつこい笑。

でもまあ、本当に終わりです。さようなら〜涙……。

自ブログでイラスト描きました。まあこんな感じで。

<http://ayumanjyuu.blog116.fc2.com/blog-entry-66.html>

ここまでの「読了」、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8591d/>

道化師消失 - 黒いピエロ -

2010年10月10日04時30分発行